後撰集新抄 戀 十一

和書門
類 二五三四三號
函 六八
架 二
冊 一五

内閣文庫
和書
類 二五三四三號
冊 一五
函 二〇〇
架 七

内閣文庫
番號 和 25343
冊數 15 (11)
函號 200 38

国立公文書館
National Archives of Japan

後撰和歌集巻第十一新抄

恋ノ三

女のもとにつかはしける

あふさかはくあふさかやまのさねかづらくるるよりとをかるかな

○僧正遍昭の百人一首改観抄ハ是ハ真貞誠信の字をさねとよむなり。よりてまたとの葛のかつらにかけたり。女の男によること。葛のものにかゝるはふかくはふ物なれバ。多くの女ハたとへハ是ハ男ハ女のもとにかゝること。加様ハ淡男ハあふゆゑの名なるハ。ハ是ハ女の名ハ。ハ是ハ逢坂山のさねかづらとよめり。初の五文字名ハよりて名ハ逢坂ハ逢ハ名ハ逢坂ハのさねかづらの上ハいふハあらハ。都鳥ハむかしの名ハ。名ハくいざこと人とハ是ハ同じかるべし。よ

町田久成獻納之章
三條家文庫
早稲田大学図書館

とよくいひわたべし。人ふ[illegible]まで[illegible]て[illegible]。[illegible]
[illegible]よしもがれとい。[illegible]とよするゐは[illegible]。[illegible]。素性
集ふ。[illegible]ふの[illegible]。[illegible]の[illegible]のさ[illegible]かづら人[illegible]び[illegible]
けま。[illegible]。[illegible]。[illegible]けまといく[illegible]。[illegible]。
縣居翁の百人一首うひまなびふ。安のやとふゆきて。お[illegible]て。[illegible]
も人ふはさ[illegible]れずさて。[illegible]。[illegible]。
初句ち。万葉ふ。名ふ負と云たり。さて。お坂のあふ。さ[illegible]。[illegible]のさ[illegible]。
且加づら。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
あらばといふ。[illegible]。さ[illegible]。[illegible]。[illegible]。
いふ時。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]といふ[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

女[illegible]わが[illegible]ふするよ[illegible]もが[illegible]。いふ[illegible]。今按ふ後撰
集恋ふ。女のもとふ。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
ば。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]。素性集の[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
の[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
逢坂。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
[illegible]。又[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
の。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

あらぬ。縁のことなるとの説ハ。まことにふよくいハまたる説なり。縣居翁の説。すべてまぎらはしくちゆゑそもくけちのことまづ名ふーれたればといふハ。名ふ員てゐるがゆゑ。名ふいそぐ。名ふ付てあるその通りなればといふ事なり。さてその名ふーれたはといふ結撰。次の逢坂山のといふ句へハ係ればこそ。三句の切ハ。へつよりかくまでて。さゝかづらゆゑ。きいふ俗くかくまでれ。名ふーれはじ。てくはんなるといふ。きらなるへかくまるなり。さゝかづらの。さ縁といふ言へかくまでといふハ。さゝかづらとハ。名ふぬねのとかよひて。なよくとあびことと。なる。万葉十四八丁。いるまぢのわたやかはらのいそねづゝかばぬるくわふまたそねぬ。同二十六丁。あげバぬまゐのうゝバせきぬまをもちびくるなり。はあびくるを名ふ員てゐる夢と名る。且妹が袋ゑ〳〵とある。逢坂山とて。逢といふ事もあるゆゑ。あるびかせ。引よす

るゆゑ。女ふ永引せさすることなるといふ。名ふ。人ふまぎと云句ハ。さらふ。やまふまでもあくちゆる河なり。一首のことハ。逢坂山の逢をいふ山のさゝかづらの。その名ふ員てあれ。ゆゑ。あるびく掛ならば。人ふ名ふまぎ。ゐやすくなびあせうけれかーむるよーもがなゆゑ。

又一説あり。名ふーれはじといふ俗ハ。逢坂の逢といふ言のゝにかゝまり。さて又その逢といふ言ハ。一首ふつゝぬきて。結句まぢふ名ふ。名ふるよーもがなハ。全くゝまでーけまと同ことふて。夢を引よすることいふ俗ふて。畢竟ハ。女を引よすちゝふ河なり。かくて。一説のことハ。逢といふ名ふ付てある逢坂山の夢を引よすことばより。まぢふ。女を引よせ。我掛ふまて。人ふまぢして。逢ふよーもがなとあて。け説ふて。さ縁かづらの俗ふはかくまでば

んなべて。件の面影のうち。人々のゆもふよるべきありと。いはまほ
ほ。此歌を百人一首筆のあけ橋ふ。祝ーたるハ。もとより改觀抄。う
はまちがひなどふ。よほたるなまバ。ちぶくきさ西なり。美石もまほ
一説あほ。粧よと考へて。別紀ふ紀すべきなほ。さ称かづらハ。和名
抄。五味。佐祢加豆良。とあほ。俗ふビナンガヅラといふ拙なほ。そふ
わふといふ例のほハ。上春下巻ふ女六丁あるいとり。

あほ。ひとの七とかふ

こひ。とハさうみもいはでなるひもの。ゆけんを人ハそまとさうみん

○君を。とは。汝をいふみもなひて。君の下級ハ解ふるふてあらん
まほ下級の。ゆるるふほ。我が為る歌は知ほ人ーとなほ。人ふ意
らるまば。下級の解るといふは。古くよほの後なり。

返ー

なほ。ひとの七のなるーもするもとけなくふかるるがおとハあらぬ。かけずそるべき六帖
○甚なるーとすべき下級もとけ称ば。のたまふ例といハ大ふ遠ふこと
かなるといふなり。末句。伊勢拙絵ふハこひすぞあるべきとありて。
此方よく安えハすれども。又ほ書のあらずもあるこの方も。之は
源人ゆる為り吳本のあらなんとあるハ。よろーかるべくもれども
はまば。

女のいとわかもはまほていふ。ひけるふ又ーほ つかはーけふ。

うーふもはかれき事のわび。なきは称ふくふ義とわかもふなりけり

○逢見ても。君がつらけまば。ほとけたるほもふくて。はかふきことの
雜義ふ軽ハ。寂ざふうーふ。義ぞとふほ事なるよふといふなほ。上

為一ふうゝ（ふうゝ）みもたれかゝるきぬのあやしきは秋なれゝゆえの見ゆる
なりけりとなるふ。たかゝ同じけれど。とゝ方遠くゝり。
見やづかゝ（なれける又ノ字）なる女のなれがゝ結けるふ。

つらゆき

（で六帖）
為むけせぬ別する人のわびしきハ人（さ又ノ字）名をあびぬ（ゝ見）思ふあるけり

○みやびかゝ人あまぢば。をりゝハ逢がゝきあり。初句の。を向せぬハ。旅
ふて在きといはんがゝ。を向をする旅後人別まりて。久しく逢ハ
まざるハ。をはづの字なるが。我ハ旅路のあをして。旅ふ在る身みて
也なきふ。かやうふ久しく逢はまざる字のわびしきハ。人目を憚て
の字なり。人目おふかゝ逢はまねば。人目を旅ぞと思ふなるよとい
ふなり。　人目を旅といふ何を。人目堤。人目の実などいふふ。似たる

つゝの（ゝ）ゐ井ゐ。物を
ゝ在あ在なる所ふ結
ゝなるゝろ。んかゝ
ふけるる男のゝ。ハ
かゝ。ぐん在きふ
形をべゝざゝハを
ふゝゝゝゝん元立
よらぬゝゝゝゝつり
けるべ所ふ絶物へて
ゆゝけるふ。ゝんえ
さりゝわれぞ

いひ年ゝ在を。
かわ井ゝ元在ふ新所ふ結けふ女ふ。ゝかはりふける男の。てゝ見てハ。
ゝゝぐん在きとゝろ在まべ。んぐゝハあを在がゝ在んえゝ在よ
らぬといゝりけまば所をかゝゝを結けふふ。見えぞを井まば。
○かを井を元ふる所ふ結けるとは。定を在ふ家ふてハなゝ。たゞ
かをふ在ばゝゝ移（うつりゝ）行たるふて。夕影上の五条の家ふどの影
ふるべゝ。ふを井てゝ。てゝふてハかゝびんふき所ふ在まべといゝ
影ふふべゝ。ぐんふき（ビン）ハ毎使ふて。たよりわろき生り。

女

右如ゝてまつふをゝんゝびふりぬまべつゝき所のれふゝもあるかふ
○居所を物へよかゝゝふのゝびゝゝゆふ。家を物へて行を居てゝもや

まり。彷ひ来ん。まつぬば。我が分のためふん。君の来ぬつらき
場所が。多くの所をかたと云て。何ぞ所でも彷ひぬ。ぬかるふ
てはあり。君のゐ乃つらきありといふをふく見たるあり。古帖。同里
七枝ふ。うき世の中あまば所のへてもすこうかぬけわ。拾遺集。
あまをよりつらき所もあさらんかひなきよりハたえてやこ
む。

だいきらい

思ひんとたのめ。人ハかりそをやりまぬ我やあらぬなるらん

よみ人しらず

○ひつまでもかまらじ思ひんと。我ふ形に思はせ。人ハ。をりの色
ふんのかはわのふをハあらぬを。かやうふ彷ひとづまもふくなり
なるハ。見ハかくとはまぬやうふなをなる我分が。女との我分みて

ハふをを。ひつぬものふなりなるみやといふなる。我やあらぬふ
ひんとは。我分お。女との我分みてハなきやうんとふをあり。と
云二思はんとなの見。人をあるをときこいひ。云の業ひちいふけん。
源氏絵あきらたのむ。ばかるふこ。ばハ。ふハなぬべ。とへをけまば

中務

いたづらにたびくなぬといふめまばあふふハ何我かんとすん
ことふなぬとい人お中務集
ある八古帖

○命をは逢ふふこをかふびけまば。君ハさも。なきふ。いつでも沢山げふ。
多サ
死るくとのふまふ形をなまば。さやうみてハ逢みは何をかんのふ
ぜ。あふふこのふるなどのたのハ。ぬらをとなる。

恋

なぬくとときくだかもひのひ見ぬバ命をいつのよにかのふさん
七六帖又ノ一本
なをふ家集又ノ一本

○君はゐぬるくといふをもちあのうやまり逢ふ人の縁ばとてもかく
ふかくて逢ふ時若ハあくまで。さくばいつのせの行方ふとてか。
余枝もをしまで絶さんとゐる。きくだふもハ偽云ふいそぐ学
テキヽヌイテ居テサヘモといはんがゆゑ　あれ見ねばハかるゝ
より逢ハ縁ばといふ言葉。
ときぐ見えけふをとおの。ゆる所のさう者ふとりのかるをかき
はけて結けまバ。あるりふれ〳〵つは結けふ。
○つゐ縁結云。此詞出男のゆる所とハ。此方をよをたる時。此男
の居たる所をさして。結ばがつかへ居る。本花の
由あるべし。さう者ハ障るあり。曹司といへる係ハ初ず去
世方。かきつけて結とは。たゞ出てある事結ばらバつけ

てやいふゆいのゞあるを。出て結けまばとそいふゞけまも
方又。つけてやいふゆをあるかさだかあるべし。今見ふ
ゆきつけてとハ。障るへやかて画たるゆハあるを。戯ごと
方どの如ゝ。色紙などゝ修初ふ画を。陸ふ貼つけたるふを
ゆあるべし。

本花結法

ゐふかけふ者とも人を見ゝしがふ枝ふゞ所我つきゆをふべゝ
○絵ふかきたふ者ハ。ゆあるき拍方まども。我が見ふ人をけ画の者の
如ゝふゆ。てゐたきゆのあり。さゆあらば。他の所へハ行ゆゞふ。
者〳〵けふゆのゝ居ゆふやうふといふ方り。絵ふ画たる者ハ。和へハ
りゆぬ拍方まばあを。主白ハ男の結ふと者の恋ふとをかゆたり。

大納言國經朝臣の家ふ侍けるを（うゑ侍けるを 伝本）平定文いと志のびてかよふ
い侍て。ゆゑすゑまでちぎりを侍けるに此この女。ふは加ふ賀大路大
臣ぷむ（の家風体）ゑんら也て。わたり侍ふけ也ば。ふをだふもかよはすする
ゝ人ゝ有をふけ也ば。かの女のゑのいつゝばかりなるが。本院の西
のたいふあそびあをきける線。よびよせて。母ふ見せ奈也とて。加
ひふふすきつけ侍けゝ。

○贈太政大臣ハ。左大臣時平公の事なり。本院ハ。即ち家なり。拾
芥抄ふ。中御門。北堀河。東一町。左大臣時平家と見えたり。に
志のたいハ。西の對なり。　加ひたゝ。腕也。　叶須也ある平
定文といふゑん。除人べきまつつか祢ふ見えたり。俗名の
みづかゝの名ゑ也ハ。ゑ也ども。叶形の須也ハ。撰者の加

ゑ也たゝふりゆて。古今集ゑどの。作者のゝづかゝ。かきたる
ふりとハ。遠つゝゑ多人ゝあるハ。叶集の俗ゑ也。

平定文

むすゝせ　我ゑ云のかゑゝきはいかふ奈ゝ　ゝたゝりゑるゝん

○昔いゑふ奈ゝ　ゝたゝりふて。今かゝ悲ゝき見ふあふゑを奈のかゝハ
かゝうき事ふハゑゝどゝゝを奈ゝ　ゝたゝ也ゝ。二三句ハ。加ゑ
おゝとの悲志ゝ　ゝたゝ也ゝ多ゑハ。ゝたゝ也ゝ。二三句ハ。加ゑ
いふやうに。（カネ）稼て奈ゝたゝ也ゝ　ゝたゝ也ゝ。　ゑゝ也ゝ。本書ふと
以てさゝ也ゝ。　さて。彼女のゑゝといふは。即ち定文朝臣のゑゝ也ゝ。
ゑゝりといふも。叶ゑを奈ゝて。ゝたゝ也ゝ。

ゑゝ

ゝたゝ人ゝ也ゝ

うつくしきを美けむさなどゝあるき蓋ぢふまよふわまはは（ど美抄本同）

○昔男ありけり。かゝるまゐをすべて蓋ふ逆ふこゝちみて。我ふがら。我ゆゑもゆゑなどうつくしかるを。伝らぬを。昔せ。かゝるのあこうちなどのたまふは。雅人ぜ。さはるのたまふハうつくしみて美なるべく人みやゆゑあり。

おなやけばなるをみて。東のかゝるかまりけるゐどふはじめておもわて。伝る女ふ。かゝやんるるき道るまば。ふもあらびまかりぬ。あどまて。ゐだり伝ける。後ふあらるるを。ゐだ。ゐらるることあるて。めゝかゝるまけまば。この女きゝて。よろこびながらとびふつかはゝたりけまべみちふを人のんざゝわたりて伝ける。ゐまはどりといふあやをふをもつゝをつかはゝける。

○やむるあき道るまむゝ。ゐゐざりにあらぬ。公事の道だちあすべて扶人行ゐをきゝて。道といふるゐ。古事記傳十四 万葉六 あどもあるて。古今集ふ八やりの道ゐゐふとりへるたびゝ。ゐみも。何ゐふるる多かる。漢文ふ。此行あど云行字ふあるまゐよゝ形と。終爲大人。（記傳ふ。い秀ゝ）ままたり。よろこびあがらハ。帰来ゐるまよろこびて。早速（サツソク）に。ゐるふわゐるせたるるあり。お拵わのばふ。まゝと云主あり。

これハどり。ゐいふなのやハ。延喜式主計上云。上總國。呉服綾（クレハトリアヤ）。同遠江國。呉服綾。白二十疋。赤十五疋。おど見ゐる。袖中抄ふこれはとりのあやとらふまつきて。さはゝふ注せゝる。延喜式ふてあとき主ゐまばいたづらふるまりと奏沖法師いゐまつり。

呉服ハ綾の名なる事。明らかなり。　くれはとりハ。むかし呉の
国より来りしはたおりのことなるを。すなはち綾の名にい
ひならはしたるなれバ。はとりのとをすみてよむべきよし。縣居
大人いはれたり。ふたむらハ二匹なり。匹も端もともにむ
らと訓めども。此所なるハ匹の方なり。拾芥抄に。和銅七年。官
符。絹絁六丈為匹。調布ハ。四丈二尺為端云々などあるによるべ
けれバなり。

清原諸実

くれハとりあやにこひしくありしかばふたむら山もこえずなりにき

○くれはとりハ。前の表にいへり。あやにといへるハ。料のことなり。あやにくには。
俗云にアヤニクといへるが如し。餘に恋しかりしゆゑに中途よ
りかへりたりといふを。彼綾二匹にそへてよめるなり。二村山ハ。冠辞
考に。和名抄に。尾張國両村布多無良とあり。詞花集にハ。参河國の二村と
かけり。むかしハ国の境などにありて。かなたこなたにわたれるなるにや
とあり。詞花集秋。むかしの国よりのぼり侍けるに。三河にて二むら
山の紅葉を見てよめる。橘能元　いくらとも見えぬ紅葉の錦かな誰
二むらの山といひけん。

返し　　　　　よみ人しらず

からころもたつを惜しみし心こそふたむら山のせきとなりけれ

○君の旅立をなごり惜しみたる我が心こそ。二村ある里の関とハなり
て止めまゐらせつれ。されバ君ハ二村山をこえでかへりしと
見ゆとなり。二村山の関といふ事。御考ある
説もあまた。なほ紀すべし。

人のもとふつかはしける。　きよ　ありがの女

義加少将もおもはせふべけまどおもふつかはしける

○逢見てのはかふのみ[illegible]ばわきぞかねつる

ふはゆらん。さらば寝ぬふ義経見まくきみもあらねば少かふ

おもふつのちてゆ義うつくとともわきの稼ゆふとあ見古今の義

かうつ加寝てのゆ見てあと同じらばくあり。　拾遺五二義のとも

思ふべけまど稼やゆ世何ぞんふ方かくきは。

少将真忠のよゆ結ける西をさわてゆとあふつきてゆきまよりか

すがの使ふ出たちてまかりけまどうかはける。

○春日祭ハ二月上の申日あり。未日ふ使いゆらる。甚仗ハ近衛

の中少将つとゆうまくよりあり。大元のさまハ公事根源ふ

ふもゆらぬ面ふもぬ我多ふ形みうきの山をとゆふきくけ

　　ふ空の女

○ゆきちぬハ。貴之集下。書深とらふだい少之様の義経うは紙ふつ

ゆ。雪ゆきぬ雪ふと人のいふときくく様のふるは風ふざりけふ共

に雪ふちゆまぬふ同じと。実冲法師もいはまたり。　一首の主は今

度。書日の仗ふ出たちゆふ少将の君ハ。此はみをいよ義の人ふあるゆ

ゆ。たまは。天加ふ義面ふ。ゆふちゆまぬ。我が涙の面ふ

ゆく濡ゆ雨ふゆとふて。義経よりふきくゆふ涙の面にぬゆ

ゆよ少いふあり。　ふは。大中少将の官ふは。三笠山と長ふする所ふ。

かるのよ少ふちりゆ義経。三笠の山をよゆふつくとらくるふ

里。拾遺雑賀。おもしろかね。かよひ侍ける所に。兵部卿致平のみこのまか
りてかねの君おはしたりといはせ侍けるを。後にきて。かのみこの
女とふつかはしける。あやしくも我ぬれ衣をきたるかなみかさの
山を人にかられて。かくて。此歌を柏木。右中将を三笠山と異名
すること八。後撰拾遺の比に。定まれるよしハ。顕昭法橋も契沖阿
闍梨も。むかしはいはれたり。さていつのころか是ハ異名につけたりけ
ん。そのよしハいまだ考へず。

○あさがほの花まへにありけるを。をりとるとてのあけていで
侍けるに。

○ざうしハ曹司なり。 あけてハ夜明ての事ときこゆ。後撰の胡
蝶集などにあさがほとより暁に出てけり。

よミ人しらず

やしなはん 朝忠集

もろともにをるともなしにうちとけてみえにけるかなあさがほの花

○抄に折をるに昔へてなり。或抄云我とくおきてもねぬにうちとけ
姿にみえしよしなりとあるがごとし。朝忠集には男の歌にて集に
又は女の歌なり。さて女の歌ときこゆるなり。初二句に後撰に君
が詠なげくもしありてきゆるには。只末句ハ花の名を人の朝出
の姿見にせんたる事。夕顔巻の風よりてこそ見まーとものめるをかな
しになのぐしろつるを花の夕顔などに同じ。

内にまかりて。ひさしう侍らざりける人もとに。

○内ハ禁中なり。禁中あるりといふ事を内わたりと云。禁中よ
り他へ退出するを内よりまかん出といへるたぐひ也。此のこらと

いづれ源氏物語などにも、いと多くあり。

さんなつかしき妹に此作者の
まんなどあるべきは、
陰ろへきよしみえて云、それと一方をいへば、一方は
女といへるも女とみえ、女と一方をいへば、一方は男と
いはでも、それと聞ゆるなり。すべて此例多かりとあり。

女しきはそのしえらぬかすみ山あまや入にし人のあとも、せぬ

○抄云、晋王質山に入て、仙人の碁を見るうちに斧の柄朽たりし故
郷に帰りしが、七世の孫に逢ふと云ふ事侍り。彼男の久しく内裏に参らずありしを、王
質が山に立寄しに准へいへり。女しきは大宮の旅宿なる故、やが
て内裏の事にいへり。彼等上古には一つの夜は逢ふ名のみ立てたしき
あへのちぎりわかるるに明けぬしにけるとあるなども同じ体なり。樵なし
こそにいとかかるをも合すべし。くちはるは今朽（クチム／クタス）なり。

女のなかにきぬをぬぎかきて、とりにつかはしとて。

伊尹朝臣

すゞか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん

○鈴鹿山伊勢をとつづきたるつづき、いぶかしき事なり。いせを
のをとかけしと鈴屋大人いはれたり。此詞はあれども、い
せをとは考へ給ひしとは思はれず。猶能く覚ゆる説もあらんに
は追考に記すべし。すて衣は、なれぬ見ぐるしき衣といふを
あまの海人の潮にぬれ時にぬぎ捨などいふは、あしきにるなか
へわろしと師翁いはれたり。一首の意は明けし。

だいしらず　貫之

いかで我ひとにもとりん嘯のあかぬ別やたなびく似たり（此哥又ニ本／拾物本一本）

○人ふもとはん雲は我ふ不審ふ思ひあり万葉集ふ歌かといふあり。
歌のうちふ人とハ同じ心別を作る女をさしをいふなるべしあり。
曉のあるぬ恋い寒ふ似ふものを形ち。遠くきゆふ我ハ思ふあるが。
中ごろまふ似たるものを何ぞや。いかぞ人みをとゞ試んと云なり。
さて考へさまうに思はるゝ。みをあらんと云意歌なり。けふ
のうふをは。何とかして。たりと云ひたふ。誰あり。あどし同じ
例あり。河の玉鉾二の巻十一巻以作ふ見えたふ。裏格ふ知るべし。

玉系業平　朝臣　（けふ一ケ）

き一ケ
恋しきふ消かへりつゝ朝霧のけさハわきもんちらでせしは（たふちゞ六帖）

○一首の意ハ明らかふ見消うへをハ心の消ふ意を後こいへ意を
見えあり。わきかへり。あどいふかへりふ同じ。　おきぬん也霧の
縁ふなり。

き又二ケ
恋のくるふあかづ。ふ一筋ふ霧やわけ〳〵とひとの堂ぶむる

○後ふ流ふぬ意を霧ふ神を。霧を霧をわけたりやと。人の見とゞのむふよと
あり。古今ふ三。秋の野ふさくわけ〳〵朝の袖よりもあはぢ来〳〵夜ぞ
あぢまさりける。けふハ。てふをはの結二句ふ。三句の。雲ハ。末句の
けふ。堂の志。ふて結びて。どくうけて。ひへ結びけたふ。末句人
のを。人や人ぱ。をどある本ハ宮須あり。考へ。玉鉾二の巻。七八の
ふうを見てわき
まふべし。

平中興

こゝろ一きも思ひ出つゝあるものを人ふ知らるゝ袖ふあり　（あり八帖又二ケ）

○恋一きもふ心ふ知つゝ出つゝ。色ふも出さで居るものを。後のも
れて。人ふ知らるゝハ。何ぞと形り。何ありハ。俗ふ云ふナニゾイナ。

ナンデヤヴイ。をどいふふをゝ。若もるんぐゝへあり。（以下の朱白も、変枝あるる事、上の何）

（ふ似たりとふ同じ。何をゝ。とあるを。あまとも。哥ハ中〳〵ふよろしかるべし。）

からうぎをあへりけるを女ふ。つくむ子仕て。又えをはず仕けまば

つのはけ系。

兼輔卿集

あふさかの木の下蔭ふぬまゝよりわず衣ではいとも加ふるかな

○さきふ逢をるゝ時ふ。後ふぬまをゝ。後ハえあはねバ。をあはぬ我をげゝ後ふを。引つぎきを。今も我神ハかゝるべとあり。

をゝいをゝ

みつね

君をおもふんを人ふをゆるぎのいせのゝ海もやいとも加ふるかな（は六帖又一本）（や又一本は六帖）

○抄ふ。ふ余綾、磯相模乃ふ磯といふ所あり。人ふをゆるぎハ、人ふをゝ

ふをゝ。高家抄等。海ハ我かゝんとハ。君をはんとの心ふをとある。が

抄ふ。　海藻ハ。磯ふある物ふ。海ハ逢はんといふをとせゝまをゝ系ふの事なり。海と

藻といふ。ふ。君ふ逢はんといふ。海ハ。磯ふ。　さてゆるぎの磯ハ。和名

抄ふ。相模國。余綾郡與呂木と有を。万葉十四ふも。相模ぢの余呂伎（ヨロキ）の

濱のとよみを。畧解ふ。今の大磯驛の東ゝのあをりをとゝ見えゝ

を。風俗方角ハ。ゆるぎとよめるの系。　極る我。乃を当ふ。通ゝをいゝるハ。詞集ふ

ぜの所よりの海ふを。下を六。とゝ海我まつふ月白ハこゆるぎの磯

ふをゝ出を今ハ根ん。

わやある女ふ。恋びをかよゝけ系我を出をゝ。ハ人ふ。ふをゝ

れゝどといゝ。はけまバ。

よゝ人をゝ

つゝ。○結ふ。れをふ。ふをの

びを。をとゝ。我ハよりせ

けるを。男ふ。ふ一人ふ

をゝまゝどといひ結ふを系。

あき名ぎと人ふはいひてあるをぬぐ〜のとはぐいのぐはたん

○一そのをりかあるを。さてこそ。兎の子ある事ハ編七あけをバ。て

とぐしき教戒などのをふ子はぐきふはあ〜祝ど。牧人の志(ココロ)を編

はんたすけとも有ると。てとふ〜てをんぐべき事ともいふぐ

し。おふ。はかの白を者ふ人ふおかのば。司馬温公ふ及ぶぐ〜と。奚冲法師

七いはれたり。

あき名たちけはこそ。

いせ

きよけをどもあ〜ぬ子のわび〜きハみ〜のけるあふ(と矣)いはぬ事りけり

○まげうて潔白(キヨ)之方をおたをまども。さやうにハ人のいはさるぶ。雑義(ワヒシキ)

なのよとあり。

志のびてすをおけ事ふ。つかは〜ける。

あ〜ふ子をいざおふ出ふん志のず〜き思ひまつべきものあり事ふ

○おふ出ふんハ。おもふんと云之形り。かゝ事ふ逢ふ事を。今ハおもて人

ふ七ふ〜まん。表晴(オモテハレ)ト云之逢(テ)ン 終ふ思ひ遂(ツイ)づきる事あ〜ぬみとあり。思

びまつぐきふ〜ハ思ひの切ふ形をいふ事り。志の落ハいまふ穂

ふ出ざ事をいふ。思ひ果べきとあるふ。とふ〜あを法落とあ

らんよりまさをさはゆゆる事り。

あれ。ものゝひけ事人。こまもかれもつ〜むを事あるを。さ物を事ぬぐ

ゝ物けをバつかはける。

○海紙を。志どけあゝ〜あれかたゝひる人といへ形人をあゝ

形きいひざはあを。家も男のか女のかわきまへがた〜今男

敦忠朝臣

つゝの○弦ゝ。わをも人をつむ事あを。てゝ事をぬべゝ物けをまどつゝのはし

雲形。男

といふ文字とかへそるふ。ハ世とをあぐるとつの〇絵ふんそそり。

はたれ掛絵

あひそそもわかるあくまのあるをせバかつぐをのハわれをざる海

○かゝ逢ふそも。あるゝとゝふまなふ形ゝハ今あゝ逢えて居るうち

より。はやかゝ（片方）みを列んで紙をげゝ掛ふゝハ。あゝざるべきもの

をとあり。大和掛絵の。叶ふの名ゝふ。〇のあればかつぐ掛を思ふ

らんあるゝもあゝそ我ハ悲ゝきとある。かつぐハ。古今別ふふハ

あゝ紙へゝとつと思へばやかつふふあるゝあるゝあるゝきとあるか

はふ同じ。一ふの意もやゝ似たり。

人のかとより。あのつきふすゝりを。　宗祇法師

〇ふつのまふ名ゝかるゝんかゝ衣ぬをみゝをでのあるゝ面ばかりふ　を一ふ

○たゞ今ぬゝゝあるゝ紙のかをかぬゝあどふ。わかをを見もあきみばゝや

かゝゝ名ゝきハ。〇つのるふ名ゝきゝ。ゝをゝをゝをゝばゝがあども忘

らをざるふをを。つゝゝのをゝ方へゝるあり。末句ハ。をとある方まゝふ

べゝ。　六帖。〇つのるふ名ゝかゝゝん胡蝶のけさをゝわきをかゝ

を末ふゝかゝ。

黄之

別つふあどもつゝふゝふをゝ彼の名かゝりをも見ふゝふゝきかゝ　ふ天

○広沢のはをちかゝりとゝはん料のをあり。一ふの名ハ明らゝの形

を末句ゝきふとある本ハ。誤あるゝ。

女のをとふつかはゝける。　こゝをまきの新長

人をゝをぬ身ハいをげどもをゝをゝをあどゝをゝをあどゝをゝきあふ後の実

ぞ宇治拾遺

つゝ物を絵ふ小理好古
胡蝶の女ふゝ

○後撰集新抄上

○君ふは給ふれば。ぜ方のかのをみて。君く達ふ手をかしこ急げとも。彼
月を絶てをいかでかと達ひまぬあとぞとある。　初句の人も女を
さしていふ形り。かくぞのり思ふを君ふ忘れぜ〜てといふをふ
る。　物古今集一つ生形こ結ける女ふ。志はたのつぎもりふ半けい
る。あしあしの年ふまあせを君るより八我をぞ絶んお仮の実

花〜　　小野好古朝臣女

東院ふりのふ人ふあしぬ分ハいつかはあえんあふさのの世き

○上句ハ。たぐかけ家のお仮の実といふをうけて〜新のをあり
東國へ往来をする分みをおりせぬハいつかお仮の実を忘絶を
はんをいふのをあり。　此編者の手。宇治拾遺物語ふ。今ハ昔一條摂
政とは。東三條殿の兄ふおかし〜ますこ〜。やごとあしよき人の姫君

の中とく。おはし〜ま〜仲ふけを。名のと母ふど我かるらひて。父ふ知
らせずつぬおどふ。ずつけて。いみじくそこ〜こて。母をせか名つ万は
ぶきをして。いたくのたまひけまば。さるる事ふとあしぶひて。ゃぶ
しきよ〜の女かきて。ぶぐと。母のわび中たりけまば。人ふれず〜
ぶをつかい〜たりけまバ。父ふ君せけまバ。さて〜こそ云ありけり
とぶひて。君〜父のしけふ。東院ふ〜とよをけるを君て。そ〜ふ方
まけんかし〜と。出集ふありと君えたり。

女の中をふつかはしたる。　　花京清正

法師ともふき人ふまけをとせ〜ほどふ我を恨だふハ言ぞ〜ふけふ

○君のつまふきふ負をとて。程ふ我も為する人
とふ名ぞまけふよとあり。あぞ名とハ。言をする人といふ名の事

ふて。古今のあやまりなだの名をやたちぬれんあどふ同じ。玉葉集

○二つまぬ形〜と見つゝ侍まあくものぶるふ我もつまあき名ふぞた

ちけ系。

かまぐ〜ふあるとふけるをとこのもとふ。さうぞくてうじをねく

まうけふ。かくるかくうときちちんするといてりけまバ。

○さうぜくハ。装束なり。てうぞくハ。調ぞくなり。かくるの

ちなくハ。カヤウニ他人メイタ。我理ダテラスルカラ。ケツク

疎ミシイムチガサスルといふ意なり。

小野遠興おむすめ

つゝかくぬ中ふあるこそうとくといて魚ぐをもてきぬふあるぬ

○抄ふ。つゝき中ふハ。魚をとへぐてゝも。疎しとおふぐきふ我中ハ。隔

果（ハテ）中形ぐまば。衣袋隔といふまぐもあり。とあり。大概抄云。袋。衣だ

ふ中ふ。ふうとかうきあるぬ衣をさく隔つ系ふ形。けたをを取

とあるが如し。けた衣だふ云くの云ふ。中と衣と袋たぐ。ふいたを系

ふ。たをを。おもいハせ見てんなぐ。果てしハまてたりしあり。たゞ匂ハ。

ちはやゝくよりふ。隔果（ハテ）たる。中ふてハ結らぐやといふ意ふて。かく

形ふうときこゝちぜ系どのたをふ。結かつけて我いよ〜つう

けまとをきをふくをるあり。昭石巻。ふ形をふぜのふぐのりけ

る逢ふの日数隔てん中の衣袋。うつがあて系。ふひも見で月日隔つ

ふ我中ふ衣ぐかりをはうゝけん。身を衣も中ふハ衣をとを心

ばかりハへぐそざうちん。

五節のふふて。宇治のわたいぎみふつかはけ系。

○五節とは。毎年新嘗会の時に行はるゝ事なり。童女四人（或五人）にて舞ふ事を五節の舞といひ。此童女を五節の舞姫といふなり。此舞妓は。公卿の家より二人。受領の家より二人奉る事なり。此舞姫。やがてめしとゞめられ。又は宮仕したる例もあるなり。大凡のことは公事根源。建武年中行事略解などの文をつまみていふべし。

十一月中の丑の日を。五節の帳台試といふ。常寧殿にて主上御覧あり。五節の舞姫は。五人（或四人）の内一両人参りの儀式あり。其外は内々参る故。暁参（又暁座）といふ。皆まゐりてとゝのほりて。帳台に出御あれ。殿上人ども。脂燭（ニソク）にさぶらふ。主上御直衣（ナホシ）御指貫（サシヌキ）にて御沓をめさるゝ事ハ此時の外ハなし。但御鞠の時ハ。帳台試に准じてめさるゝなり。帳台にわたらせますのなど。

礼舞あれ。頻輔（ぶんだくら）などいふ事あり。

寅の日ハ殿上の淵酔（エンスイ）あり。朗詠今様などうたひて。三献（さんこん）ありて。乱舞あり。次第に沓をはきて。女官の戸よりのぼりて。うへへ参りて御湯殿のはぎ[illegible]よりおりて。北の陣をめぐりて。五節所にむかふ。其後所々に参りて推参（スイサン）などあれ。郢曲の事なし。毎（て）まいたん（旦）などうたふ。右京女院など刷砕あれバ。けふあすのなどあれ。けふ御前の試あり。御殿の廂（ヒサシ）にて乱舞あり。櫻など线[illegible]。昔ハ事ゝに行はる。今ハ大嘗会の時より外ハなき也。昔ハ猶使などいふ事ありけれバ。けふ五節所に行かたはらんたるに。かの[illegible]のきじなどを石ましに。使の[illegible]を。猶の使とは中也。卯日ハ童女御覧。清涼殿にめして御覧じ。御前の[illegible]はの

をりふ。いづ主の時ふか。庭の下より髮を引きつまて。庭火焼ぜらまけるとあや。下仕殿上或庭ふ免す。今夜中日卯新嘗の条なり。　辰の日。豊明の節会なり。新嘗ふ条なる。上卿宰相弁ふ忌を着る。夜べハ。諸国のふ忌を束帯のよふ着なを。今日ハ。青摺を用ひ着る。宰相外弁の上首をつとむ。南殿の廂ふ。瓦子をまうけて。内弁以下度ふつく。白酒黒酒の盃をとり。大学ふの別当大学七よりて。舞姫の祭る。ふ屋神を鞦して。かつを入る。事ふたんたに上達部。ふ芸ふをとぶらひて。饗馬条などうたふ。〻今日の辰の日乃節会ハ。大嘗会の時ハ。辰日。践祚の節会。巳日を主基の節会と申すなどなんなり。　ふ芸の記りハ。續日本紀。第十五ふハ。天平十五年五月。癸卯寅郡臣。於内裏。皇太子親舞五節。云〻とあり。是ハ天武天皇礼楽ふ。ふ。ふ。線治るふ事ふ〻ぎ。ばとて。つ〻せ。ふよ〻ふり。　又。江次第。仏書。河海抄などふ。平朝月令を引て。同じ。浄御原天皇即天武なり。帝云ふ。大海〻くけふ時ふ。天女あ百くだりて。をとめどもをとめさびすをかつふをたゝふおきををとをさびすも。とふひて。ふたゝび舞たるよりわて。是より。是なり。本朝文粋第二ふ。三善清行の延喜十四年月意見封事ふも。重按旧記。昔神女来舞未必有定数。四五人と見えたり。かく。まば。ふ始ハ。新嘗会とは吳事なりけんか〻。續紀ふも。五月と見えたまでなり。さまど。清行の封事の中ふも。伏見朝家五節舞妓大嘗会時五人。皆預叙位。其後年〻。新嘗会四人。無預叙位之例と見えたまバ。延喜

のごとくありてハ必大嘗會の儀嘗會ふつきたるゆとなまるゆ
ゆゑあるを（世代五節の始めなどの事ハ歴朝詔詞解の二の巻ふ委しくいまたるを必見るべきなり）
舞妓の數も定まる數ハ天平十五年ふハ孝
德天皇ゆゑ皇太子ふ〜をみづから舞ひたまへりといふ
みてまつる例なり四人五人あるふよりてなほふふ公
事根源ふハ四人とあるを江次第の次書ふハ五節不受ゆ分二
不公卿分二所以上四人也とあるを退出の條ふハ第一人第
三人第二人第四人とあるを建武年中行事畧解ふも四人と見
えたるを清行の封事の文ふ引合せて見るべし大嘗會ふハ四
人新嘗會ふハ四人といふ定まりやをけん　大嘗會新嘗會と
ハ十一月中卯日ふ今年の新稲を神ふ奉らせたまふ義なり伊

代の始ふ行ひたまをば大嘗會といひ毎年行ひたまをば新
嘗會といふなり大嘗會を（オホニヘ）新嘗會を（ニヒナメ）といい
ふハ大嘗ハ（オホミアヘ）新嘗ハ（ニヒミアヘ）
唱へたまふ如なり（豊明節會ハ彼新稲
を今日主上もきこしめ給ふ饗宴なり　五節不
とハ此舞妓の息不（俗ふ云休息不樂）なりとぞいひんがなとなるべし
ふふて裝束ふ
なるより見え江次第ふも常寧殿西塗籠内帳臺上敷長筵其
上可敷舞姫座其前各立白木燈臺一本（云々）殿内四角各卜五節
所（云々）時射五節舞姫參入於玄輝門（下車公卿束帯相從入五節所有筵道）諸大夫
四人執几帳角殿上人付童女（傳等云々）ふ
ゆふたへたる上達部五位ふをとぶらひて侍るふ

ふとも見えず。又公卿朱雀相板なども見えたまへば、汁麻呂朝臣
も、さるまりふけるよりかけらまたるべし。ふかき色の
まりのさまは、源氏物語、をぢの書、又紫式部日記などに見え
たれども、大ていふハんなるべし。　宗祇、大意ハ、宋牛女也と
抄申えたり。

をろまさの朝臣

○抄云、日蔭（ヒカゲ）のかづらとハ、きつねをゞせといふまゝ、一説、後家、陪従
ふ、夜の日乃舞妓の装束、青摺の唐衣、赤紐、日蔭、鬘等なり云々。　一説
のまは、素の乃ふかくまゝる、日蔭の蔓（カヅラ）の書きまゝゞ、我ゞ考く者を思
ふんと同じゝいつも書らぬ。ときはの色なるゞ、今日ハ形まゝ、源き

色の見ゆるを、まゝ書みて、我ゝ紙を推量（オシハカリ）なくとあり。

彼と那ゝかゝるまゝふふのくらんいろをときはふいのぐなのまも

○抄ふ、僻按抄云、おもみとは、物嘗舎ふト合（ウラヘ）の人ハ、小忌（ヲミ）を見るゞきふき
人の例の束帯をきるを、をゝ夜ハ大忌（オホミ）の公つといふなり、黒抱小忌と
ハ、青摺とて、山藍（ヤマアヰ）みてすまゝ抱をきゞすゞを、小忌の王ゝなど、江次第
ふいくり、物をハ物宣りたるふ、をゝふみ、朱雀をを大忌といひ習
もゝて、物多あゞ、さまゞバ、汁麻ふ、彼とふかくるあふをふ、あまくゝ
る中ゝて、一人をゝも常熟の色ともれぬゞゝとあるゝとゝ
たり、まづハ汁をあるべゝ、さまゞど、汁後今みゝゝんゆるぬやうみも忌
ハふまバ、物考ふべきまり。

為つぼの人〳〵、身をふりあらきけるぬしなんて、ゑとをがゝとふつゐは
ゐけゐ。

○抄ふ、村上ゐ皇の中宮、安子、九条右大臣師輔公の女、後ゐ冷ふれ
ゐ、ゐ、ゐ、栄花物語ふゐ、ゐ方の女房達の、月ふありき〳〵
みやとゐゐたり。けゐ紅葉集ふハ、月和ふ、ゐろき衣どもの
かぎりきたゐゐ女のあゐたゐどぬたりけるゐとりがゝとふ
ゐゐゐとあゐ。

清正

ゐ主とゐゐ、ゐゐゐゐ、身れふわゐるゐをれもゐたゐ、ゐん

○抄ふ、粉多ゐの君〳〵、人〳〵の中ふ、君一人ふ取ゐたゐ、我ゐざ〳〵をゐ達
とゐゐ、ゐゐあゐ。ゐ意ゐふ、ふき衣どもきたゐゐ女どもの、あゐ

たゐのあゐきふゐけゐをゐ〳〵あ〳〵たふ一人ゐゐをふ〳〵けゐ、後
ゐ有好、ゐ雲のゐ形ゐ、ゐ、ゐ〳〵ゐどゐ出ゐ君ゐ見ゐ初ゐき。
ゐゐ清智師尹卿ゐふつゐけゐ。

東院ゐ清

ふ一吳

ゐをゐふ、ゐ〳〵ゐ唱ゐゐ、ゐ、ゐふ、ゐすむゐりのゐ那ゐけゐ

○抄ふハ、序ゐゐ、鶯乃ゐゐ中ふ出巣ゐゐふゐゐをゐひゐけゐ、我
をゐゐ、ゐずゐりのゐとゐると、招むゐゐ〳〵とあ主とも、上旬のゐ方、
たゞ序のゐとゐゐ、ゐゐの中ふ師尹卿ゐより此女の許へ消
息ゐりつゐ、ゐゐゐふ、ゐの中ふ、ゐゐ消息の、女のゐふゐ那ハ
ぬゐあゐ、ゐゐふ、ゐ〳〵たるゐ消息ゐ、ゐゐ、ゐ〳〵ゐ〳〵。　一ゐのゐ、ハ、我がゐの巣を
もゐゐはゐ〳〵、ゐゐのゐ消息あゐハ、実ふハ我をいゐひゐ、

すを甲（ヱ）ぬまんのうち乃ぶ形るよふといふあるべし。

だいしんぼ　　若狭彩長女

夕さる生ば我ヲのこゝをかぶりけまいづまの方ふ抱きぐんん

○古今哀一ふ。まひくふ抱さだんん方也ふ。いのふ祈ゝ衣ふ着ふ見

えけん。といふを本ふみて。本ふふいんるぬ。抱宮むべき方だふ見

云ぬば。着ふだふ達見ふべきよゝ也ふて。夕方ふある毎ふ。ふた

也の恋ゝきい。我ヲふふよといふ形るべし。

ありはらの元方

着ふだふまぐ見見ふふ哀ゝきハいづもふ（ふ哀）るてゝろふるん

○見ぬ哀のふふ。　四句ハ。哀本いつふ（ふ）の方法るべし。　つゝの主ハ。

明らかあり。古今哀一。四ヲハかゝてあるけまふ風の見ふんぬ

八も こひゝかるける。　みぶのたゞみ子

見ふてふふ子をぞ行くゝふ子（ぬたくゝぞ）けふ着ふのゝこそいふべかるけま

○見ふといふ子ハ。着ふのゝいふべきふみをあるけ着よ。さふ見を化の

人ふも いひふ子ゝ左ふが。移左きふぞとある。　移左ハ。俗云ふ殘（サン）

合（ヲシ）ニまふ。ロヲシクふどいふふ也ふ。落ふふりを惜（シヲシ）み悔る主あり。

ふふゝハ。今旧（フルシ）ふ。旧ふる（シ）ふる形り。六帖。見ふてふふ子よりふかふ

又も。ふ形。着ひとりを。ハわきて志のばん。着鑒集。見ふてふふ子の也

ふだふふりぎゝバ我ごいん。ふとぞ着ふいそ中ゝ。新勅撰哀三。恋

○しきも。あは主も左ゞ比多加ふを人ふふるさぬ云の第也ふ。

戒仙法師

あふぎ〜りてや見まし（紀の玉ふの六帖）津の玉乃 今もありてふうらのまつ〜は

○若見〜人ふどの。津玉わ〜りふ立と（アリ）ゆ〜てよ〜てやりたる歌もあん

あ。抄ふも。或抄云。津の玉の人を。潟初為ふ世〜を云ありと見えたり。

古今云。四。あふぎ〜い末も見て〜加山ずつの垣ちふさけるやはと

撰子。 潟初為ハ抄ふ為歌抄云。きの玉の浦初為と紀末よむあ。云帖

ふは。きの玉に今もあるてふと河りを見えて。彩績古今をふ。大納言重光

紀の海や津津波よの寄る玉を寄ふの玉を家潟の初為といふも見

○名古屋ハ。六帖ふ。紀玉もある方や拾多べき。三。四句。津の玉乃の乃の詞

へすく家あり。叶子玉の絃。三の巻 句を〜べ〜て〜ふり。

廿六の絃ふ。秀〜ニ見えぬ。

やんごとあきるふよりて。書き所ふまかりて。たゝん月ごがりふ

形ん。まかりすゝ家べきといひて。まかりてぐりて。みちよりつか

つかさ絃云。人絃あひ

ちわて結けるふやむ

ごとあきこと也ふよりあ

て。書き所ふまかり

てたゝん月ハかりをふか

んまかりをの人家べきと

いひて。酒あるてぐり

て。をとより書ける。

もけ家。

○たゝん月とハ。末月のつゝたちに比をいふあり。 英之

月かゝりて雲をハ。ゝんといひ〜の巻日だふへ〜ず。ゝる巻ハ冬一ヶ

○一巻の巻ゝ。ゝあり。万葉十二。風ゝ〜て雲絃ハ見んと思へ。ゝも日

もかゝ〜ば。ゝて。ゝの。ゝげ〜き。

わ家ど。ふふ〜やづかゝ〜。拾玉。つ拾ふ見絃〜〜ける。ふ。つかは

〜けふ。 みつ絃

いせのうゝふ。ゝやゝ。あ万の。歌衣。ゝるとハ。す。ゝ。あはぬ。ゝ。那

○叶。ふの。歌衣ハ。裏絃の。ゝふ。あゝ。ば。絃。ゝの。巻。ゝ。ゝき。衣。ゝ。ふ。ゝ。ふ。ゝ。

歌葛（カヅラ）の。ふふ。て。絃。て。今。の。巻。ふ。も。ふ。ぢ。だ。ふ。と。て。山。絃。あ。ど。の。ゝ。る。ゝ。の

あり万葉集三に「千鳥の海人の塩やき衣の裾ごろもまをすあまの
ばいなどゝ記るまゝ、堂伝記形ども同じ。さて上句は、古歌とはいそ
ん料の序のゝ有り。衣の形ゝ、堂ハ古ゝ、やまとゝかゝるゝ形ゝ
を、人ゝ訓るゝゝ、ハ堂ハ、いとゝ、ゝ記ハ堂有り。同じゝあるゝ。堂ハ別る
堂ハすまゝ、実ゝも逢ぬ者の形といふ有り。

だい　たらゝ

わゝの浦ゝ　ゝらの浦集　人たまゝ　六帖集同　見別

○係さゝゝ、ゝハ、我思ふ人と海とのあゝ。続後撰巻一同せの海乃の
海と有ゝ、むや君てふ名ゝのふかさかづきゝゝべん。かづゝハ水
小潜入ことゝ有ゝ。水者の水ゝ没るをもいひ、海人の海底ゝ入て拾と
名をもいゝゝ。迦豆久ハ拝也。額衝といふ也。水ゝ頭を衝入てふ

語有りと。縣居翁もいはまゝ有り。

人の主とゝゝゝて侍る人を、あゝ有りてはゝのはけ系。

右之

かゝ衣かけてたのまぬ時ぞ有き人のつまとハ形ゝふものゝ

○我ゝ夫ゝ有ゝあゝ。他の男有りとハ思ゝ有ゝ。拾ゝ神ゝよりハ、
考ふんに加けて、形まぬ時の男も有ゝ。古今巻二よゝくゝふぬ
ぎてわがぬ系ゝ衣かけて思はぬ時の男もゝ。

人の中ゝ小まゝ加まりけ系ゝ。すのゝふゝ系ゝ拾ゝけ形ゝ。すを
ゝきあけゝまゝば。ゝゝゝ。ゝわきければ。ゝ。ゝかゝりてゝゝの
ゝゝふつゝのはけ系

○此初出集ゝは、女房の詞ゝ有ゝ。拾ゝけ系ゝ。

○やえきたりけるを人のやつつけて。ぬぐ入ふけれあ〜たふとき。

何たるぞ〜〜あ〜〜のりもの〜〜ふるまひまどすぐ〜〜ふよせ〜〜ぞ〜〜き

後京極殿

○我が蔭を引あけたるに。さわぎのたるに。ぬんハつらけまども。蒼蝿

小ぜたる法ハ意〜〜思ふよとあり。法の砂蝿ふませてるを

世人〜〜。蠅蝿ふる〜〜といへるあり

あれ。ちりて法けるぬの。ふ形ぬやうふみえ法けまバ法ふ〜〜

けるを。

○ふたぬやうふとハ。女のふのふ法ぬ。何とすやそ〜ろふ

隔ふるやうあるをいふ形り。俗ふがテンノユカヌ。といふふ

や〜をき詞なり。

千載
後京極殿

後原後陰朝臣

○すべて隈のある所ふは。立かくまをらるゝものなれども。今君ハ松あれ

ど海なく。法まなくありゆくハ。何方ふ立かくまて見よとのたまはせ

と云て。思ひやりもなく。法まぬけまバ。せゝ逢ぬんやうをなり〜と云

形也。　思ひ〜ぬまなり〜〜ぬ。俗に。思ヒヤリノ無イと云ふあり。古今

諸俗

菅家万葉

かな。竹川巻

思ふてふ人のふの海ごとふ立かくまをるよ〜をが那

嘗のわまてはぐ〜むさ〜〜義思ひ〜ぬまあるぬ〜〜もらる

〜〜ゆゑ風ふのまわ〜かな思ひ〜ぬまなきは松ぬ

見るる〜〜。

をぬまのこゝろやう〜かまぐるふ　ありけまバ又ハ云　みえりけまバ

○やう〳〵ハ・漸〳〵を書後ふとゝる事り・俗云ふソロ〳〵といふ事

を〜・

古方 作者

はゝきをもとう紀をもよそみえ〜かゞも我身ふをきよんらそるけき

○世中ふ憂きつゝきといふ事のあるを・人の上の事乃やうふ打もひ

居つる然・今ハ我身の上に・近き世若なるよなといふ形り・小所集・「我

身ふも来ふける・世のをうきさるハ人のうへゝをおもひけ系かな形・

女ふんぎ〜あるよ〜をいひはかゝ〜たりけ逢ぞ・よの中の人乃ん

さだめなけきば・命のゝがたきよ〜をいひて俗なきバ・

○此・詞出又一本ふも・女のもとふんぎ〜あるよ〜をいひふつか

は〜たりけきバ・たのゝがてきよ〜いひて俗けきバとあり・

主家元方

淵も瀬ふ事りかはるてゝふあすか川わゝりゆんてちをゝるべかりけき よのなかは六帳 たるよのなかのふ まゝ・まゝ・けき 伊勢集

○此・あと・次二首の俗義とは・伊勢家集ふ出たる方・中かるべくおもは

流・新ふ今を次二首を合せていふべし・

いせ

だい志〜次

いとはゝる身をうきはゝみいつ志かゝをのすか川をもたのむ〜ゝあり 又二本 形る 家集 又一本

貞〜

賜を改大臣

あすか川せきてとゞむる拍なゝバ淵せふなる心形ふかいもせん 京とのいとゝ 伊勢集

○此三首家集中ては・四首はゞきて・仲平公の俗答ふて・俗大政大臣 ハ時平公云

ミ 詞出ふ・男の・人の詠ふ詠るふやうとあり・彼集ふ男心ある

ハ・仲平公のうちり人の詠ふとは・仲平公の・時の左政大臣の舞ふ形

まて。きはふすこのゆくをいふなるべし。かこて。神ふ。「飛鳥川ふち
せふかはるゝ世をなみなかき世のうきものといふ意なり。是
彼奪ふなりゆくるを。恨みもするなり。みなかみ——ものは。水上下を
ゝの変たるよし。上下の人皆いふさはみて。変ふ意なり。君の情
又遠ひもあきるのゆくゝ思はまゝ絶といふなり。「渕
八潮ふゝくみて。仲平公の詠なり。一首の意八。我かゝ乃変ゝるやう
ふ。人ゝのいふといふるまゝ。此度の奪ふとゝまたるゆ八。我か
ゝはゞかゝるのゆふハあゝ次。まことふさりがゝき節ありてのゆなり。そ
まを他の人の口ゆて八いかやうふいふともそなるは。よゝ西一月
てゝるべきゆそ。此方のゝの底ををはかゝばふ。人のいふゝとなゞや
ふよりて。恨みなどすべきゆふゝあゝばとなり。又歌。伊勢なり
「いとはるゝゝるゝ。さやうふはのたまひても。右政大臣の奪ふなり

て。他の女ふあひ申ゝ申八遠ゆは。ゆ一。絶まば。我をバいやしひゆふな
ゆ。かやうふ君ふ厭ゆる。我分の憂さふよゝ思ふに。今八何を形
ふすへきゆも絶ゝ次。さて。飛鳥川の渕瀬のゝゝ世中八変りやすき
物といふゆふ絶まば。世中のかはるをゝいかゝと絶んかゝ
と思ふ生絶るなり。申一又うまゝ。此ふ変るゆもなりんかと。せい
ひてさても世中の変るを絶つるは。大和国なる父の許へ申て。別
て居絶らんといふをふゝめたるなるべし。父の許ふ大和ゝ別かまゝ
るゆも。家集ふ見えて。此時のゆなり。飛鳥川八。大和国なるまゝバなり。
「あすか川せきてとゝむる物ならバ。仲平公の返し歌なり。又の　彼むもふな
ゆゆふゆ八。仲平公をゝうゝ思ひゆゝるゆなる和ふまをふて。
世の中のゆゆが人の力ふ任せらるゝ物ならば。いかやうふをすべけ

まども人のかゝてゝ及び雑きハ川水のせき止えらまぬやうなる拍
あり我かけ度のゝも我ゝふ任せらるゝゝるゝバんの変たるおど
ゆゝ何〳〵ふいるべき〳〵ふ〳〵んの変たりあどいたるゝゝるハなけま
どゝも世中のゝハいかゝみせんゝ方なきゝまバいかゝとも為すべき
やうをあ〳〵といふに世方の大和へりこを止えらるゝをのあらばば
とゞむへけまゝゝといふをふゝめるふるべし。　物氏給者のゝハ
委〳〵別記ふいしり。

女四のみこふれたりける。　九条殿　右大臣
あ〳〵たゞの海べふとゝもへぬまどもちゝろはゝせのうへみのこゝ世
（うへふのゝとゝのへぬまバあ〳〵たづの拾遺）

○初二句ゝ我の卑きるゝり。三句年ハ経ぬまどもといふふ久〳〵く
んをかゝるまゝ。　んハ雲の上ふのゝとハ皇女の居事なまばな
ゝ。結句のゝそのゝふあまといふ紐を思ゝ心ゝるまゝり。ゝく
そと中ゝぢむゝんハ云をいひ抄しゝ下へゝ世ゝ云ふ〳〵ゝふ拍ゝり古今
五四浦のゝふのゝふハ思ひゝ山柴のとはふまゝんゝ世のゝゝとゝゝ
ど結同。五結ふの巻二
業ふ委〳〵ふゝゝゝり。

ゝ

なゝゝゝの雲井ふかゝんあゝバよ我ゝて深ふゝゝばぞあゝまゝ

○んハ雲の上ふのゝかゝゝふとのゝふまゝまどゝゝの上ハ雲井ゝり雲井
ハまゝ紀百ゝり。ゝまゝき他ゝへのゝんのかゝゝふ人形ゝバ年を経て我
が許へハ行ゝハぬ伊んゝらんとゝり。寿の如ゝよ世和へ能りんふ
らば深ふ年経て住むにんハあふまゝきゝゝとゝいふ陪ゝゝり。　以
ゝのゝゝハ勤子内親王と中ゝて延喜の皇女ゝて天慶元年ふ右大臣
師輔公即けかけ家の作者の右大臣ゝり。ふ配せんまゝるゝ〳〵一代要記ゝどふゝえ

せり。

せうせきつかはしける女の又ことに人ふたつかハりてきて。今ハ思ひしらせ給といひたりてをけるを。きゝ給ふ。又ハ

○後太政大臣のかくれ給ひ給ふ女の又他の女の許へ大臣の

あやまりをこふよしを申出て。まいりもせをバ思ひ絶給へといひ

おこせたりけるを。ふ。ゆをきゝ給へる歌

後太政大臣

松山ふつゝりきふがゝも浪こしん事ハさ次ごふかふ〳〵きをの我

○こゝ方のんがつゝきなふ形ゆざりのもちびふかの女をかゝらひて

はるかふこのゝ今をらをふたを来〳〵ゆを遣へて。絶果ん事ハいと

かゝふ悲〳〵。我ハさ新んふて。ハあ紀まをを。ん強きゆをものゝまふよ

世をあり。けゆ伊勢集ふてハ。初出を形にて。自己の歌のゆ〳〵。然らバ。

彼大和ふゝ。ゆをふを。仲平ゝ。ゆをふ。仲平ゝ。ゆをふ。仲平ゝ。ゆをふ。

又ハ仲平ゝの歌ふてもはらん加。今ハ思ひ絶ゆをふどいふ事ハ。伊勢

の許より。仲平ゝへいひやらるべきゆのゆ〳〵也。思ハふ也バあり。

つゝの事ゆゝ。いせがまづゆ　ゝやづかん志をけふ女をどひはし〳〵あるを。拾をんといひ結

〳〵をけるを。あひ〳〵　けふふ。おを之ゆかりけ也バ。

ゆをふ。物をえんとのひ侍　いで又ハ事

けるふ。おをくまかゆを出

ゆをゝをぎ。

○松を之ゆをかり出とハ。間より出を。逢ゆの遠きふり。女初出

伊勢集ふ。この人のいをうとふおは〳〵ゆ〳〵ける。こゆ事和

ときゆをけふハ。おをんゝすゆのさわぎゆを。ゆやゆ〳〵ふ

むを絶けれ。よひふ。ゆつゆりをさぶらふ。女人のむをふ那

ゆふ〳〵をとゝぎゝの。ゝら人といふ七の〳〵を。あゝ〳〵ゆふ

まなまなん。先のきこえんといひけり。かへりことゝ志げし志。
ばしといふ。始ることを我なんといひやりける返事ばをとことよ
ひのるに云々とあり。ことゝしげし志げしといふ始ることゝハ。
下執一に。渓織后の歌としけし志げし
ハたゞまさひの歌におもふらん歳ハ
出てもらはんといふ清言のゆへなり

枇杷左大臣

世の歌に
よひの歌にはやなどはじめよ夢のかゝふわかし床も打もしふべく（支云姑）
○えし人逢ハぬが恋しき成に。おもひ逢ハんといふ聯まば。とかくいは
はばらもかくて出て逢て。世方の人我などさ免てかまよかし。そしく
逢ハぬ歌に。旧（フル）くなりて塵のへとなりし床をもうちはらふやうに心なき
べく家集によりて思ふに。かのことゝ志げしの清言をいひ出しける
ふ。よりなへ難なまば。初句のよひの夜にとあるハ。本条の三四句に

あたり。末句の歌はいふべくハ。本条の出てはらんかあらず。
よみかへるなり。

返し

○家集にはとうこまたりける女かへ志とあり。

いせ

わたつきとあまふし床を今更にそちたぐ袖やあわとうきなん（拂ん家集）（きえ六帖家集）
○私が床ハ久しく君に訪はまたるゝ事もなき悲しさに流したる涙よ
て海のやうになりて。荒果侍しなり。さ荒果てる床を今更君に逢ふ
中々。袖にて拂ひ侍らバ海に涙の浮くやうに。私の袖が海にて浮く
ふもや侍らん。さやうに出はてて成に。今出る事をも大ゆゑ侍る
なといふなり。

んぎーあるて。いとかはける女のもとより。人数あるぬやうふ
出典一本
いとはけまぞ。

○人数あるぬやうふとハ。長谷雄朝臣歌。女ハかとーめいふ系
皇第本巻ふ。馬酒の子を。指ら後づふ見だて。物けふ見れや
ど歌見色ちて。人数あるをやとはつかつ。ちくとりくふ系
きどひあれいーしけ朝臣乃いまだ議官あるとんんの事加又
ちたハ蛙をあくとあふへー。

長谷雄朝臣

○花のかよくの。よ[illegible]ハ。ふ第の事ふて。をいくの舟上を云ふあを。胡蝶
巻ふ。[illegible]せの中ふ根ふかくう色ー行のるの花のかよくあや花ひわ

かるべき。伊勢物語。廿一ふ。花のかよくふをりふけまばうせくあり
にけまとゝるあぞふ同じ。一ちの色ハ。海ふいとりちて。よそ同
ふ見ちてハ。むけふ様く寞ちて。笠ふ何もかもあきやうふんゆる
ものを。其ちいくの分の土をば。かもあをと思ひて居るやうすふて。
きやうに思はるくよをを云て。我をちかくあるものをと。いふるを云
ふふふふ。ちたるもの歌あり。新古今雑下。ちの中ふ四方の浦くたづ
ぬまど今ハ我分のいふかもあー。兼盛集 須ヶ浦ふあきりする海
人の大かふハかもあるあぞと思ふべーある。中勢集。あきりしてか
ひあをけりと思ふ分をうーみをふると人や見るらん。

だいちらぶ

紫式部大臣

松山ふ伊勢集

のぢきあくふどかも松山浦てきををあををばさらふ思ひちある

○波おさゞ雲ゐ〜おとを思ひ切て。ふるさとをまうをわけもたい。
ぜうりいふ。ふ。ゆやうに思ひ切ゐ〜ぞと。とがむる。あぢきなく。あどかは波紙を思ひ離て。ゆぞとある。さて此詞も例の仲平云とのあるべし。時平云との中ハ。松山ハ波紙あどいふやうの事ハ。たかうたやうあまばあるを。

伊勢家集

返し

きゝをたく。おもひ〜みちあば松山をおたふて浪ハおさんとぞ思ふ

○岸をたく。湖の満たるぬく。佐んのあだゝくおとあるべハ改て雲
雲をやぶるといふ。ふてハたく。上方ハ雲を穿るやうふても。ゆふ
ハ雲のやぶるふてあらんと思ふ説とあり。ゆふてハ問徒ふてと
いたんがめし。かゝて此二句。おもゆ〜みちあばの。〜の詞。昔より助

辞ゆ〜ふ〜。未詳。実ハ假ふ名ばけていはん。ハ。他ハ名ばけんき事
うゆをけまば。助辞といはんもあたらざるハあらざれども。初学
の事ふどハ。此ゆ字ふをハふくたゞ五文字七文字のたちべのたち
は絲ば法へ。ゆいふて。あるもたきも。同じゆのぬふ。ふもゆ佐ゆる
えりさるみぶりあるゆにはあらぬ。是ハ都て。ゆの法ふある辞
ゆ。俗云ふ紙ゆ。ゆいそ。潮ガサ満ヒ山タナラバ。といふ。ゆ。ふて。ゆ〜
文字ハ。沢云の。ゆハよくあるゆ。ゆいぼれの。ゆあるをも。味ゆ試てさ
ゆるべし。俗云ふて。ゆとくバ。あがフルといふと。雨ガサフルといふ
ゆの。ゆの辞のあると。あきゆふて。をふ法涉あるを以て。よく分べ
ゆ。ゆ。秋ゆ。ゆハ。ゆ紀ふ。ゆ。
ゆ。ゆ。松きて。待けるをとゆ。
をゝとこのとゝちけるをその男のゝ又ノ一ゆ

返しやるとて。

○まもりハ。肌の守などをとて。抄ハいてるがめくるべし。行

思ふ。けり。守ハ。かはらぬ通たんるーあとふ男の色をたるふ

ものうんか。ものさはるとぬ。たゞ。ものたるやうのるとハ。

思はれざまばなり。

こまひくの紅葉の姫いよ紀

よとゝもふあげきもりつむ。ふ。あまばなどやゆゆりのあるかひもあき

○山ふ山守をねくるハ。本をみぐりふ。ばらせぬたんあり。我ハ。ゝ。ふ

げ。ふ。ばらつむなり。さて山守のあるかひあらば。かやうふ。あげき

ゆゝふ本をば。ばらつませぬもづるるふ。山守のあるかひもなく。な

げきをこうするハ。いかなどやと。さて。けるは。君の色ひめくばらて

けれ方ふあま。君が本ゆゝ。ばけ。守のあるかひもあけまば。返ゝ。ふ

する。ばとなり。けゝの下句のてふをはん。などと疑ゝて。山守のゝ

ゆゝふ。ゝなり。さて。守をハ。物名の。ゝの。ゆゝ。やゆゆりとふ中へか

けて。いひたるものなり。よりて。ゝの表をハ。山守のゝくとんりて。守

の事を表へたゝくハんなべかりば。ゝゝの辞ハ。束句のかひをふき

ふて。ゆびたるなりハさらふふまでもなり。こまをけ集。ゝの。大

かりハなどや。我品のをーかりん。ゝの。ゝとふかりん。拾遺十七。

琴の音ハなどや。かひあきたるばたのあかぬゝを引ーとゝ。ゝ。なゝ

どのゆくなどゝ。とつぎけて。守のゝくとしてハ。ゝの表中ゝぞるゝ

ゝ。ゝハよくんせざまば。守といふるふ。ゝ。かまて。んは。ぬべきゝ

なり。

人のかつらをとりあげまぼ。神といふ人をつかひみて。

○此詞は信明集ふ。そぞといふ女つかひたる人を。女ふ

つけてとはり。

よを人をうば

人をまぬわが物思ひの後をはそぞふつけてそみをべかりける

○こゝハはのきらかをを。

あやなどをたてするをとゝ。おかざはふをりぬべゝときゝて。

後京玄忠がいとうを

山のをふかく分たひの為えさらバ雲井をがらもあはまと思はん

○抄ふ。雲ハ山の端ふかく分ものまばいひかけて。あやなどをたてをせて。物

かゝばゝふるをよりかゝかゝばゝまゝ思ひだふ絶ずハ和ざ

まふをり。雲のはるかふ隔たるとも。あはまと思はんとあるを。なる

がゝ。初句ハかく新といひ雲なといはん料なり。忠見集。なかも

なをうきて見ゆまどあをの山ふもかく分ものとゝ。

まちををの君ふ。ふゝつかはしたりけふ返るふ。みつとのゝなり

けまば。

○町尻ハ抄ふ。四条の南を町尻といへり。為家二条より南をとも

ゝと見えたり。奥沖法師を二条より上ハ町口。下ハ町尻を

見ゝいゝまを搭芥抄ふも町尻殿二条北町東関白道兼家とゝ見えたり。かゝて

此詞出ある。町尻の君といふハ。玉葉集をふ。町尻のごといふ

何ものをまを同人ふもあらんか。

をろうぢの釣殿

なきながれる涙のいとゞそでぬきバたかなきゝゝも神ぬらしけり

○我が泣流す涙のいよ〳〵添ふ者ゆゑ。あゞ。たかなき月つとばかりの。逢
ふも。神ぬらし次ふよとあり。月つを水ふいひよせたるなり。清濁
にかゝはらでかゝさ海ふいひ。なれハ。海を潮ふいひかゝる彩みて。
多くなるゆゑなり。

だいしゝゞ　源なの曳

義はむかりき此ごとたかなき掛ハなかりそうちとて人ふあふとこらん

○義の如くたかなき掛ハなきよ。いかなまゝば。逢とゆらん。逢とゆ
ゝも。実なるゝねバ。かへゝゆゝを思ひのそはゆゝものをとあり。三句なかな
ゆけりとある語勢。力なりよく味ふべし。
まくろざゝ結けゆふ女の。つまをなきふ。

よみ人しらず　ときのゆきなかり又一本

○毎夜〳〵思ふ。廉の義ふはあふと月影を。せんて片時のうつゝふ
てもなまかゝといふなり。古今二点忘わびてうちぬる中ふりかよ
ふ義のたゞちにうつゝなるん。回三点義歌ふはあゝもやすめゞ
かよゝゞもうつゝふ一月月ゝごとハあらゞゝ。

返ゝ

時のまのうつゝを思ふんゝそはかなき義ふ海さゝざまけま

○逢ふといそゞ。時もゝそゝ逢ハまゝゝき絃。時の月のうつゝ。みても
などのゝまふはんなを。はかなまき義ふも同じゝ。たかなき出んふは
なまといひて。さ絃たかなきはんふ。つまなくゝ侍るゆゑとあり。

古今三「うば玉の中にのうつくしさぶかるる春ふいとうつくしもまさ
らざりけり」新古今三「あぢはふにかかる春けをうば玉のはか
あさ夜ふかとるうつくしハ
ぞしいしいぶ　そろぬ
玉ぼ菊ふかき入江をおぐ舟のうきたる恋も我ハもるかな
○上句ハうきたるといはん料の序のこゝなり。うきたる恋とは。ゆも
かもよる方なく定まらざるやうの意なり。さて此こゝは古今二
ふ「潮つ潮ふ根ざ」とぐ考ぬうき草のうきたる恋も我ハするかな。
ぞ侍るとこゝ。意ハ同じ。こゝて序の句遠へるのこゝなり。此歌の意。万葉ふも
多くあり。すべて心とつふものハ細のなやみなり。主ハをはゝ同じけ
ぢども。たの〳〵一そとなり。又同じ主ハ何のあやまりべのよ〳〵

あ志ゆて。まさりたとり出よるくなるものなり。志は初学の業など。
よくふ始べきなるものなり。ものついでふいふなり。　玉ぼ志万ハ。
紀伊国なり。海部郡と。續日本紀。第九ふ元。三代實録。四十ふ。元慶五
年十月廿二日。丁酉。紀伊國。正六位上。玉出島神。授従五位下。なども見
えて。志はもと玉出島ふて。法文字をは濁りてよむべきをすゝてよ
むは誤なり。うつが物語吹上巻ふ「年をへて波のよるてふ玉のをふぬ
きもとえなん玉いづる島とも」あるて。此次くふ玉出る島とよゝ
新分牲あり。

紀内親王

法のふふのなふハたゝ海人をしゝゝとも先ゝとのやふ志がるを
○正義ふ。師説云。すゝもたゝ史とは。浦ふすむ海士などハ藻屑をかき

○いつゑて嬉けば。ふよこを。ゆゑば。てゑゆるばかりの烟なり。さて
ちふこがらすとゑはの出の高ふはをけば。けるい名ふたくん多
の結けまバといふ多をいはんとて。はのほとよゑる多をとなるが
ぬし。云ふ出毛ふ殺しあどせバ人の初て名ふたつべけまバ出て
ふの内ふてのこふよくと思ふこがまゑる多の。わびしきとあり。六
帖高ふハがくすをたくゆのうちゆびてもえふてゆ出殘ゆさうん。
人行ゆ出ふまかまて。つまざらけまバまのうふ姫あのして。加
つゑとていふいれ結けゑ。

○すの高ふ簀子ふて。今出ふいい姫。椒多の幕木巻ふ門出き廊の
ちゆをだつ掛ふちるゆ姫けをとばかまゑ見ゆる。高ど粉雨く
にふえをり。

ゆめぢにてもやどかす人のいつくませば稀ざえふ霧ハたくハざくゆ

○夜べ宿かして。内へ入まゆはぎりしあふ簀子ふ。あかして。霧ふ
ぬまくゆるのうちゆに。ゆくゆ。ふやゆ見る霧ふも。春かに人の来き有
ふ。いつもくゆ霞ふ。流を流次多よ。南かす人だふいつば。加ふ霞ふ
霧をバ拂ハて掛をとなる。古今二 貴ちふも 霧やれたうん 春ゆに
がう通へる神の高ちてかまかぬ。

返し

後川高がに祝ざめもあるものをはくふばかまの霧やなふ多る 後撰

○切なる思ひの上ゆてハ。川の姫ふ流を高がにるゆも。春ふ行るゆふ
て結るものをさやうふ拂ひまる霧が。何ゆどの流ふて結るぞ。さやう

小原かゝぬ山ゐ水ゐ歌ゐも同ゐハへ生ゑ〜せざりしといふなり。

○此歌古今集ニ入つい先ども紳ゐたゑ方らぬ物ゐ玉ハ人を見ぬ目の

涙なりけりとゐふふこゝへて。れろかゐる涙を紳ゐ玉ハなす我は

せきゐのへゐ潺つ涙なまばといへるゐ似ゝるいひざ海なり。

んぞ生ハあるながら。元あれぎりけゐ人ふつかハしける。

みる名かる方であふゝふあ〜ときゝ玉をさくやの海はかづかぬ

○抄ゐは。をにハ湖なまば海松和布かゐ海ハあ〜と申ゝなり。さりと

も。玉藻ハかづけとなり。嘗うちかづきて。出び出あへかし〜となり。と

なて。縣居翁も玉嘗ハ衣服のゐふよりへたる物なり。逢へば衣服を

かづゝとなり。逢ハぬ衣服さへかづかぬとのゐなりといひきゝ

ゐ。此をみて考へいちゞ。湖ゐは。海ゐ海松和布ハあ〜と生ゐべ

わ。さまども。同じ影の玉藻ハあるべきを。そまをさへ人ハかづか

ぬ女のかはといひて。玉藻をかづゝとは。実ふ逢ゐるといふなどの。

哥ハあ〜とも。なゞ物語するなどの。なば〜出て。ハ出逢はるべきも

のをといふなんか。又ふふ藻ハかるもかゝるなど云て。掻きよ

する物なまば。かゝといふ詞ふよりて。あの手として逢ゐる手ハか

たゝとも。あかきそたなどの手ハあるべきもの。を。生あの言伝

をきへ。せぬ女のかたといふ言なるんか。下句の語勢ふ。は。あの手

とゐんも強るべきやうふもいるなり。

かへ〜

なのゝ言てあふ手あゝの志げきまふいつかゐ女をあゐハかゞかん

○抄ふあふゝといハゐのゝ〜て。逢がゝき陳（サハリ）のゝ志げき問ふいかゞ嘗

○かづきてもあらばんとなり。波早きには。藻もかづきがたきによせて
るべしとなり。　又かけ言の玉藻を筆語の事と見れば。かふとらふ
名のことにて。実に逢見る事はなくとも。人目なきの志げき間に。いつの言
葉に。なをもかき侍らんといふにてもあるべし。　かくて。此贈答は。
上ノ句一句も。下ノ句四句も見えたるを。泊といふ女との贈答ならんか。
さらでハ。かけ言の二句。返しの初句などよしなきやうにきこゆるな
り。

こゝろざしありて。人にいひかはしけるを。つれなかりければ。
いひわづらひてやみにけるを。思ひ出てしきりにいひおくりけ
ける返事に。かゝらぬさまなりといひおくりければ。

○此詞書。いひかはし侍けるをといへるは。又つれなかりけるは

といへる故ハ。かはらでふるを云ばをむけりすべて此集の中に
ばにハ。綴多志と縣居翁いはれたり。今思ふに。是ハいひつ〃か
はしといはゞ志つの字を落せるにてもあるべし。　人なりぬ
さ侍なれ共ハ。一度いひやみたるを又志きりにいひやりけ
れば也。

かづらきやくめぢの橋にあらばこそ思ふ心をなかぞらにせめ

○抄に。役行者金峯山と葛城との間に。岩橋をかけんとて。諸神にかけ
志むるに。葛城の一言主神。形見にくしとて。昼ハ役せず。行者怒りて
呪縛せしにより。橋ハ止ぬ。此橋ならぬ我中なれバ。中空に
志ては。えやむまじきとのこゝろなりといへるが如し。　此役小角が故事
ハ。霊異記。元享釈書。金峯山縁記。袖中抄などに見えて。此集の比より

ゑふも考なき事なるよしたり。撰集抄に見えたるは
けうかあり。さまざま実なハ神の御
上ふ小角ハ呪縛せられまの山ふもどいふ事あるべきなはいろ所の
法師むらのつくりなり。

人のもとなつのはーけり。　古大臣

かうまぬなすむをーなの考たえばちけどかくいちきはみぞちけ新
○隠岐（カクレヲキ）なすむ誓誓の如とといふ序ありて考ずちけども人ふ
ちうまぬ言ハかひちーとなり。

つりどのくみらふつかーける。　陽成院御製

○つりどのくみこハ一代要記ハ光孝皇子簡子内親王元慶八
年六月賜姓寛平三年十月二十九日為内親王延喜十四年四
月十日薨配陽成院號釣殿宮と見えて紹運録ハも簡子内親
王のよーに見えたまぬ抄ハ綾子内親王仁和皇女と見え実沖
法師も綾子内親王の御事といえまるハとも誤なり。但
実沖法師の釣殿院ハ光孝天皇の御所の名六条の北東洞院
の東なりこまを綾子内親王ハゆゑらせなふゆゑ名ハ釣殿の
ミなをハ中なりといはれるを思くに此内親王の
御名をのミ偽らまるさ侍なり。　陽成院帝ハ神武帝より五十七代ハ
南ーせなり。百人一首うゐまに形ゑハ大御父ハ清和天皇云く御位
おりさせなりて二条院或ハ陽成院ハ和はーけ形なり。
形神ハおりーまはちどハ陽成太上天皇陽朱院上皇陽成
帝陽成院君など古記ともハ見えたまどたぐ今の必ズ陽成
院とのミ十とまなり。御諡を某院ゼ十位なりハ後ハ六十三代

冷泉院より始まり給まばこまい陽成天皇とかきるべきを
ものを今のめくらるるハ後世の俗のわざなりと縣居翁のい
はれたるがめり。こはまの作者の作者などのあるつくりきる
はれ侯まるさはなきばとも彼百人首よりして世人の多くの
て。まづあの歌ハ此たる影那わ。たまり
つくらそ称の峯よりおつるみなの川を渕とまりけるぬ又一本
○筑波山の峯より流れおちて落る谷水の美奈の川と云浪き川ふな
影をめらみ我が妻を恋るこがつゆりくて今みてハ浪き渕のめく
に彫りつるよとなり。みなの川のみの云を蔵る水といふかけさ
せなへ影なり。筑波山義家の川ともみ常陸国なり。万葉四巻懐歌。
「筑波嶺乃伊波毛とぐろのつる水代みもあゆらみ我加れもはな
らみ。義家万葉集を方なるつくそのの山のつくくと我ものとつみ為

つのよ拙云兼覧を
をあひ初て結けるふ
まうてもちびあるて
後人ふをいつ沢こ恋
城のみ歌ふてがりを
あて又言をせぬ結
けもバ侍のはけ
れ。

をつみつる。
あひ初てを結け家人のまうでこずあるをのちんふもあらぬこと
恋をのをきくこばかりを見て又者もせば結けまばつあはける。
○あ恋をのをきくこばかりにてをいのをとばかりと同じを
のかさ彫をたる影みはあらぬ。古今恋五「山の井のあさきくもも
思はぬふかげむかりのを人の見ゆらん。などの影みて。のを
は毎くのをあり。いつもくよそみ者をきこばかりにて。みは
方へ中をハ。れとづをもせばといふあり。

よみ人しらず
なごり
かりをごの者の雲井はるかるきてをハ今ハかぎりの者みぞあをけ家
ねふこを　けを又一本
○山雁の者を者ムちムやうふよ我に出者のけをハ。今ハ沼のは者

にすゞきさえは侍しよとなるべし。

返し　　　兼覧王

今ハとてそむきかへりぬる春なればおひ風にてもきこえましやを

○抄に。今ハかきりとかきやうの春なれば。追風の吹やうにおくりてもきこゆまじけれど。かぎりと思はれバこそ。春もきこゆまじとなりとあるがごとくなるべし。わりなくるはかりにいとはれなく。猶るものことなるべし。猶ノを。わるかりともいへばなり。

花ざかりのけしきやうくつらげにみえければ。　　小町

人のうきよるにたのまるもよると日も涙にぬれつゝ過ぬ日なき

○抄に我人からうきたる人にあはでおもひて。日毎に袖ぬらすとな

つの侍にはかひかき
あまりかしこまりて
人ふ女の許よりな
きのふなどの事をせ
ぬといひおこせたり
けれバ

思ひやるがごとし。　詞いたく。上ノ句ハ俗ニ云ニくカラウハ氣ナルコトヲシ出シテ言といふ味ひもあるべし。

花盛のにつらく思ひかまへけるを。女花ざかりになどかきもせぬと。いひつかはしたりければ。

○花ざかりには。花ざかりの花なりと。つかはすにこそ思。

よみ人しらず

わすれなんと松ゆふんのやにかゝらばつれなき人をうらみましやは　ざうし侍し本

○なまぎり思ひにもなどいひおこせたるを又なるハ渉きんと思ひてたまへたる。我もさやうにたやすく忘られぬなとなりへ。そのつまりきなもうらむべしや。我ハ深きんなれ。

つかうまつる法師よりは女ふあひて。かまくらびの後に河ノんとちかごとをたてゝ世をはけるまふ。あくまりけまばあーなふつかまーける。

ゝるゝ、ゆの容易（ダイヤ）かゝる奴おふ。そ那くのつまをきをも恨べきゝ知れをそ。そをまおふれとつまをもせぬゝる様とゝふゝるべー。古今ゝ云。詞

あんと思ふんのつゝかゝるみあをーよをけに拙ぞ嶋ーき。

よひふ女ゐ河ひて。かゝ形らびのゝふあはんと。ゝすぶと我たそゝ

せそ。あーたふつのはーけ新。

○ちかごとハ。誓言なり。け祝ゐ。あはざりけまばといふゝまを。

おゝるゝるかと。炎沖法師もいそをたり。

○

ちはやぶる神ひきかけをちかをそーゝとゝゆくゝあゝがふゆめ

○歌べ育ふ逢たる時ハ。必後ゐと誓ゝをゝるを。を誓ゝゐハ違ゝを。

逢ハざりゝるゝ。さて今朝ふゝるゝを。さやうにハ誓ハざりーゝゐべく

必ゝ手（アラ）ふを。神のゆゝが免ゐゝんゆのれをゝるーゝ。分のためゐいゝ

きゝゆゝゝをばとゝゝを。　ゆく。ゝの須のゆハ。土ゝ一ゐゝり。　あゝゝ

がふハ。手ふゝり。下ゝゐふ。芝巣のゝくはつをゝゆきゝゝふ。ゝ形ゝゆの

あゝゐあれハつゝゝといふ形れ。　ゆゝゐ。いゝ。ーもる須ゐを。分巣ゐ多

ゝ。嗔の字をかけを。古今ゝ云。ゝーゝゝゝゝゝゝゝを思ゝ第の相すりの

ゝいゝゝにいづゝゝゆゝ。は字をを続ゐ。色ニ出スデハナイヅ。カナラズ

カナラズと。紙さをたるゐをもゆき下ふべー。

院のゆゆとゐ。あふぎつかはゝとを。

○院のゆゆとゐをハ。祐ゐゝゐばかゝーををる。大和といふ。女房

のゆゝゝを。

右大臣

ちはやぶるゐはゐをこそへをまどゝ新をあゆゝゝ見ゆすーかるべき

○其方を浦と思ふ。わがもひとなる大の中へ我ハのそ。大ふとるーきるよ。
そなたハかへ者ーき思ハ。ハあらじ。そなたふ。けふを渡まバ。ふーぎふ
其方ハ。帰まそて。左ちなるんとなるを。　あやなくべ。けふなどのハ。俗
云ふ不思議ギニといふにて。
かゝるみちの網長。かまがふふるを。とーあそて。とぶらひて。伯けけ
まば。

○兼通のわとぐい公卿補任ふ。藤原兼通。右大臣師輔二男。天暦
二年五月。左兵衛佐。同四年正月。従五位下。同六年正月。兼大和
権介云々。天延二年二月。任太政大臣。貞元二年十一月。薨。諡曰
忠義公。贈正一位。号堀川太政大臣。とんそなまべ。けふ集をそう
ばまーそろハ。いとぶ。泛五位下みそ和はーけふるを。ゆるを。

此朝臣ふ。兼通。胡侯とあ。ハいぶかーきるを。四位ふ上の
人を。某朝臣とかき。五位ふ下ハ。朝臣某と出そう。万葉集古今
集をもふ同じけまば。けふ集も同じ定なを。

元平のみこのもとに

あそ。のみこの宮ーもそなを。松山の寺のふいとぐ。ちるう。春

○寺の松山を。年も経て。待まば。波のふふいかぐ。待るにて。さだなそも
はや浦も経るふみを。待らんとそなを。もそや。君も。袖を。遠くのふ。波ん
ふを。待らんといふなり。　松山を波の袖ゆといふ。詞ふ上を。年も
経ぬるとハいとふ。ちなを。

もとのめふかくをすむとき。を。をとこのもとをつかはーける
よみ人しらず

わがくらべいせぐあさくやみをぬらん　伊中の清水ふるさまなれば

○をとよをゝ我には、源かくぬ清ん、源ゆをゝ流ふ、みをゝやあら
ん、かくりすゝゆふ、田（モト）の雫の雫の方ふは、ん源きのまさまをとあを。
もゝの雫ふかくりすむるを、伊中の清水を源むといふは、古今新
上ふ。「ふ」ふ人の伊中の清水ぬるけをどもゝのんを志ゑ人ぞ志む。
とあ新ふよをゝ志るべ。さゝを下志ふ。みもあるすゝけ弘人、ふみも
いなゝぞわかをけるがとゝ日をゝをもあるんとあきゝを結ける。矢
をゝんをゝつかむ。けふ。「ふ」ふ人の伊中の清水ゝるかゝふさゝぐ
むゆのハ源をけを。をどもゝを。又中勢集ふ志をゝる人の。をゝう
いき。ふ。まゝゝいきけるふ。ゝる人の神をゝ中ゝぬゝ以ふ新伊
中の水の源きゝかをふ。をどもをかれふをゝゝゝ。　伊中の清

つかを結ぶ。中世かゝ
ふつかは。ける。

水ハ、河内。まゝ。播磨。をどいふは。俊ふを。太和の布留伊をゝ。
。要之集ふ。「そのかゝふる伊の道の。をわけを清水ゝみにへみも
かゝゝん。をどいふを引を。古今俗材抄ふ。美仲清所ゝ。ゝいをまゝ。
をすゝ。をゝ伊中の清水を。中。妻のをふ月れ
をゝゝと。をも。ゝ。いはまゝゝ。
女のをとふつかをけ。　源中正

あふゝをゝをゝをゝをもみをゝ。ゝが新。をのゝをゝ。ゝへわゝゝかをけり
○近江路ふ。逢道をかけゝり。　をゝ。ゝは。業平（ナリヒラ）。をゝ。をどいをん
ゝ。　。近江路を。業平。ゝ。ゝ。ゝをゝ。ゝをゝ。ゝをゝ。ゝをゝ。ゝをゝ。ゝをゝ。
きは。ゝゝゝも。逢ゝ。ゝきゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
をゝるゝとゝを。　逢坂の関のゝをゝゝとゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。
古今志一。「逢坂山」とふ。ゝゝ。逢坂の関のゝをゝゝふ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。

返し　　下句

道さくるぞやとやハちるぬあを坂の実のこるくハうゝといふなり　　ぬる又ハ

○三句のてにをハハ何とゝゝ[illegible]ぬぎ[illegible]ぞ止果ぬへかりといふこゝろなるやゝ[illegible]ハ止ハ為ハ年[illegible]

○[illegible]ぬハ不なり[illegible]ふをハのるゝ[illegible]巻の十一ナニ[illegible]

上春下七丁かゝるぞうちぐよをやはつゝゝぬといふ歌の下

又色紙ちゝなどふいつるゝをも合せたるをわきまへぐ[illegible]又の一本

ふやゝやはちぬるとあるハ少えぎ新なり　四句ハ抄本ふ実の回

なるゝとあ新ぞよろこき[illegible]ハいまぐ逢ハ

ざ新時ふ逢ひたらん後のゝをいひ表の方みゝハ系よりをこの方

をさ[illegible]へ新るまゝ[illegible]ハかをゝ[illegible]　一首の主ハか

けゝふちるぐちるゝとゝゝふあたをゝ逢ちゝでとハい

つるふなり道をちゝで止めへかり何とゝ止ゝ[illegible]ぬぞ[illegible]

方ハ湖なりとゝふるなるをとゝゝ逢ゝぐやゝ[illegible]へかり逢ての後

ハ憂きるあをといふちるゝもの[illegible]

世のもをみまかをたるふはやかゝゝ行とのゝひけまば

よゝ人ゝゝぐ　　ゝゝちり山帰

つをちきを見ひちのぶのさ行のぐゝゝちるをもいとふちるまけり

○抄ふちのぶのさゝかぐゝとゝ信夫山のみ味るちゝをちきを服

ずちゝ[illegible]ぶちどふ第ハちるをもいとふと[illegible]かぐゝハちるとい

はんとゝちをとあ新がめゝ[illegible]ぶハ堪ぶちを新古今[illegible]

きも人のつゝき也ちのぶるゝ[illegible]ぬま　信夫

山ハ、陸奥國、信夫郡なり。山里系松岡など宮多らよりあり。下離刑、右列がむすめの、みちの国へまかりけるつかはしけるに、後系後轉が女

君をのこしたのぶの里へゆくもりをあひづの山のはるけきやなる。かくてはかなく思ひ思ふのさきかづらと云て、後撰、山のといふことを見んも、詞のつづきかたいとすぐなるさまなる。思ひたのぶの山かつらともはるバ、後撰、山乃山かづらの事なるべしつぐけたるなるべしきかづらのさ絲と云詞、さ一も用なけまば、中ハ宮後系やなども思へど、六帖にもさねかづらの影も出て、今と同じけまべ、宮後系にあらざるべし。さ絲かづらハ、なるといはん料なるべ。

あつよ一のみちの家ふやもとといふ人ふつかはしける。

右大臣

いかさまにふ思ふ出ずと思ふるを意一きゆるこそ意なれ。

○一首の意ばらのなる。思ふ出と、忘わびぬ事と思ふると、意たきと、ふる思ふを四時ふいふて、あやとしなくるなる。新古今意ふ、

のうきも人のつらきも思ふるふ意たきふこそ思ひわびぬ事。

いかはけ一け女の、いまハ思ふわけ事絲と、いひ伝けまば。

紀ノ長谷雄朝臣

我が為ふ見みるかいもなく一忘草わすれぐさのもとみ一あるを移ば

○抄ふ、純中抄云、忘草ハ萱草也。本草圖経云、令人好歡樂忘憂處、畧註

奇のふハ、我左名ハ、忘草を見ると、左と萱草を見ても

忘ると、おどの意なるを移ずとなるとあるがゆ一。

忘びてかよひけ影人ふ。

右京有好

あるにもつゝむ男女のわびしき人まにのゝ幾絲ハなるまけ系

（カケ系勅撰）

○一ぞのゝ人ぞかなる。人まゝ人の形きるなり。

をのいとゝ作りけ系をとゝ。いとゝわづらひとゝ。いとゝすぐはせん。いまと

（の又ハ二なし）

もいとゝはまちてよといとゝ作けまバ。

○男の作よる。たゞ〳〵いとゝ相とせたる系をうちやゝたるふやうふ

たゝて。あるつ系系ふいとゝわびて。今ハいのふともせん方なし。

器（イヤ）といとゝ切てあるとも。とゝまよと。いとゝ相とせたるあるゝ。

よゝ人〳〵

小山田の苗代水ハたゝぬまもんのいけのいとゝハ形たゞ

○我が為ゝをせぬ者ふ。まゝ者ハ系累のふともゝ。否唯（イナヲ）の者ハいとゝ

祝（ノリ）ちハ一作りまといふを。池の械（イケ）を幾つゝふいとゝふあるゝ。和名

抄云。械音戒。淮南子云。決塘發械（ツヽミヲヒラキカイヲ）許慎云。所以通陂竇（ヒノ）和名以比。拾遺雜

系。とゝもかゝるもいとゝはるゝまよ池水のふかさ渉さをたゝまるあるべき

下系ハ池水のいとゝ出系ゝとのかをけまばみぶゝりあるべくとゝ〳〵ぞ

つゝ又け系。又系六。いとゝさゝ〳〵とゞ系ゝらるゝあるゝ池みの渉いづかゝふ

よゝんとすゝん。ふの池といとゝふ。ふの水ふの澄あるどのたゞとゝ

あるべゝ。きまゝど。池のふをハゝ多ゝらゝへどもふの池といとゝふ。系づ

らゝきあるゝ。

かゝゝたゞ〳〵ふ。人の家ふ。人をゞゝまゝりて。かゝゝまゝゝあり

けゝ系。

○男ふ人を男ゝ。方遠ゝふ行て。ゝ系ゝ初ゝ達初たるあるゝ。

ゝは。代人ふ達りん料ふ。ゝとゝふ治出ゝる。方遠ゝふゝも

あるべし。此女といふにも。もとより。他の所にありけるにやとよ
○これをかよはしつるが。その女の所にては。逢ひがたきゆゑ
あれば。方違へにかこつけて。具してゆきたるなるべし
し。方違への事は上巻二に。委しくいへり。
にみえん。此ちぎりおきてしひめ松の根ざしとめてし宿は忘れじ
○一首の意は。よくきこえたり。宿は忘れじと云て。逢初たる人を忘れ
がたく思ふこゝろなり。宿といふに。逢初たる時のことをこめたることな
り。松の根に。寝をかけたるは論なし。
物いひける女に。せみのもぬけをつゝみて。つかはすとて。（かへし 抄 ぬけから又ノ本）
源重光朝臣
これを見よ人もすさめぬ恋すとて音をなく虫のなれるすがたを

○抄に。八雲御抄に。すさめぬは。めでぬ也云々。人もさしてとりあへ
ぬ意に。蝉のもぬけしからのやうに。やつれはてしすがたを見よ。是を
あはれと思へとの心に。かくよめりとあるがごとし。　すさめぬは。
結句の賞翫もせずといふことなり。古今集上。山高み人もすさめぬ桜
花いたくなわびそわれ見はやさん。同雑上。大あらきの杜の下草老
ぬれば駒もすさめず刈る人もなし。　音をなく虫とは。蝉のことを
いへるなり。上巻に。詞へむなしきから宿には夏むしの声より外に
とふ人もなし。ともいひ。又蛍を。詞へ音もせで思ひにもゆる螢の
身よりもあまる思ひなりけりとあるなどの類にて。つゝみの意に詞
をも合せんとて。手拘とさしたるものは。明らかなり。上巻。詞へ
て音をなきくらす蝶のもぬけしき意も我はするかな。新勅撰恋五。

杉の生たるこんかうみやうつせみのはふれる家ふり分をこたらん
但古拾遺、君があくるいとなすきゆくいづくゝよ志する人の志
をすがくるを。

人のもとよりかくりまできてつかはしける。

さかのうへのこまろ

あひこそべちぐさむやと我おもひしふるぎを志ものかりけるに

○逢見てばゝ逢見たらばちぎりは文字濁るべし。逢ひぬ前ふハ逢
見てあらばなぐさむみてやなりんと思ひつるものを逢見て後ふ
ハ。そゝあでりのかゝ見てをしきゆゑとあり。あぐりとゝ涙をふよ
せたる波の引去たるがくかゝりこいきくかゝ形容してあるをいふず
もとふて。たとへバ山の端ふへたる日の。時光ハ形容ばらゝ波て

あるがゆきをいふ志。人ふ別た形をりふいふも。ふたる後ふ形逢
たる時のさまの志らをしバ或は梅香などの形容してあるなどやう
のゝをいふ志すべて波沙のゝふて。よゝんならゝ志。こは今
俗ふいふをとハ。似て異なる何ふて。初学の選ひやすきず形ふかゝ
ありゝいふ志。志もあそのてふをハ。玉葉五の巻四季ふ見ハ
志ゝ中ゝてゝと書りたる拾ふ。もあそのゝふ志ふ志のをあそのをと
ハ異志。志ゝ中ゝの梅ふ同じ。三の巻その外の俗と考へ今すべし。さて志ゝとゝふ。梅ゝ
却て。のをふゝ志ゝ。さまバ。あそのゝへかゝ見てといふをを加へ
て見ば。志の志ゝ志ゝ加形。とて。けあれ見てはの志又。拾遺十三。寄志ゝ
今ハとゝゝと思ひつゝぬる夜志ゝて寄見見てけ志千載三。時雨
みやゝゝとゝ志をつゝきゝよゝ志ゝ志ゝ形ゝ志ゝけ志。清正集

かくるみはちぶさむやとそかくるもきくるふるもちはやぬきまきさ
ほけまき・などかくるくるり・寄一くさは・玉結を見てわきまきてゞ一・玉結ふの巻廿
紫ふるくるたる・ちもそのはをもてかくるくるり・ちもて・かくるて・はくのくるふをはく・二
すまべ・ちとおよくくらるる・ちもて
白のやへ直ふ・ぐうけまばは・はたびはトつハるむび・梦の辞ハ・三
白ふて一と結びて切なるをまふに・とうけて・物ものつぐけたるな
ほ・はは結ハいとく・ちもてそのちもて・ちもそハ・未白ふをけまと結びたるもの・結
のうをふ・矣ちもて・寄一くく・玉結三の巻十二・ふ見くくほ・

後撰和歌集巻第十一新抄

尾張名古屋書肆
東壁堂製本畧目録記

画譜繪手本之部		金氏画譜	一	永樂百人	一	艶玉百人	一
北齋漫画	十五	英勇画譜	一	花蝶百人	一	棲鳳百人	一
北溪漫画	一	浮世画譜	三	蓬莱百人	一	今様百人	一
北雲漫画	一	英泉画譜	一	今様百人	一	吾妻百人	一
珊林漫画	一	一筆画譜	一	福善齋画譜	五	錦葉百人	一
蕙齋画	五	福善齋画譜	五	浮世画手本	一	同寸珍本	一
文鳳画	一	浮世画手本	一	初學画手本	一	麗玉百人	一
神事行燈	五	初學画手本	一	武勇魁圖會	二	同寸珍本	一
富嶽百景	三	武勇魁圖會	二	狂画苑	一		
北齋画譜	三	狂画苑	一				

百人一首之部

和書之部

本居宣長翁像 一
地名字音轉用例 一
源氏物語手枕 一
天祖都城辨〻 一
御遷幸長哥 一
歷朝紹詞解 六
古今集遠鏡 六
美濃乃家苞 八
古事記傳 四
同 目録 三
神代正語 三

新古今集抄 五
詞林のひ合鏡 二
八日〻日記 一
花のゑ〻美 一
面をみの鏡 二
萬我の比禮 一
尾張廼家苞 九
江戸職人哥合 二
冠位通考 一

碁經之部

消息案文 一
熱田縁起 一
伊勢物語 一

碁經奕範 二
碁經奕筌 二
碁立手談 一

將碁之部

將碁道標 一
同指南車 一
同名家友 一
同金襖 一
同階梯 二
同鷲拓 一
同自在 二

神壽後釋 二
玉勝間 五
直毘靈 一
葛花 二

萬葉集畧解 三
同 目録 二
後撰集新抄 五
同 別記 一
三代調類題 六

〻草 二

詩集之部

日本詠物詩 三
暢園詠物詩 一
蒙求標題詠 一
金城白湯集 一
三野風雅 五
先友詩抄 二
寒林刪餘 一
枇杷園發句集 二
晞髮偶詠 一
同 後編 二
日下新詠 一
同 七部集 十
畸人詠 一
同類題發句集 二
金山稿 二

經書之部 六
群書治要 四十七
孝經鄭註 一
同 指解 一
劉向說苑 五
同 纂註 十
同列仙傳 一
服膺孝語 一
世說音釋 五
左傳蒙求 二
物數稱謂 一
律數楊榷 二
今世說 一
傳子 一
六論衍義大意抄 一
祖來大曆帖 一
廣沢樂得帖 一
夫子廟堂碑 一
朱子風雪帖 一
宋七君子法帖 一
歐陽詢九成宮 一
早見道中記 一
神術極秘卷 一
石刻法帖之部
子昂要雇帖 一
同 羊公帖 一
王由敢寸珎孝經 一
李邕沙羅樹碑 一
羲之周府君碑 一
信海三十六哥仙 一
道風草書帖 一
漢魏隷書帖 一
渤海藏真帖 一
丛翁茶史 二
大學參解 一
論語參解 五
四書片假名附 四
文選李善註 十
星渚堂對問 一
毛詩國字辨 十
牧民忠告解 一
千字文約說 一
女ゝ可一先 一
常語藪 二
韓文起 十
東坡自我帖 一
同 大江帖 一
同歸去来詩帖 一
董其昌天馬賦 一
衆鳥帖 一
同 秣陵帖 一
九疑山碑 一
郭有道碑 一
陋室銘 一
敬之字 一
算法之部
玉積通考 三
點竄指南録 十五
開運塵劫記 一
新選塵劫記 一
永樂塵劫記 一
算法立夫之錦 三
周髀筭經圖解 五
同 國字解 二
萬宝大通考 一
早引相場帳 一

醫書之部

傷寒論持解　五
同　正文　一
醫聖堂雜話　一
醫家千字文　一
妙藥手引草　一
本朝水種方　一
延壽養生談　一
養生要論　一
内外要方　十二
醫事古言　一
方書摘要　五

手本物之部

大橋遺帖　一
同改年帖　一
同池凍帖　一
同今川帖　一
同書用集　一
同當用集　一
同書札集　一
同新消息　一
同初學手本　一
同假名手本　一
同風月往来　一
猴山千字文　一
同書通案文　一
同書札法帖　一
同四季文集　一
同嵯峨名所　一
同江戸川用文　一
同四季假名文　一
同年中帖　一
同清風帖　一
同乞巧帖　一
同詩哥帖　一
同私用集　一

物品識名　二
同　拾遺　二
吐方撮要　一
蘭藥鏡原　三
醫家日記　一
的治療方　一
經穴秘授　一
藥品考　一
提耳談　五
温疫論　一
同明衡往来　一
同離賣往来　一
同江戸往来　一
同江戸名所　一
同早速千字文　一
同當時用文章　一
同永樂用文章　一
同自在用文章　一
同永代用文章　一
婦女用文章吾妻錦　一
同上紙　一
同筆用集　一
同尺一集　一
御家書札文海　一
長松貴札帖　一
長雄書札集　一
荒木今川狀　一
同赤壁賦　一
行成朗詠　二
空洞書翰　一
尊圓親王古今集序　一
二節詩哥撰英　一

佛書之部

圓光大師御傳畧賛 二
菩薩戒童蒙談抄 一
釈迦應化畧諺解 一
永平道元行狀圖 二
觀音施無畏圖 一
現生護念之圖 一
宗門畧列祖傳 四
圓戒琢磨訳 一
稽古御和讃 一
白隠施行哥 一
釜斯幾 一

字引節用之部

満字節用錦字選 一
早字節用集 一
小本 一
真字附 一
同 大全 一
手紙早引集 一
却説浮世之助話 一
戀女房讐討双六 一
一對男時花哥川 一
同 後編 一
晴雨考 辛〻出板 一

袋入赤本之部

松緑高砂話 一
天竺徳瓶譚 一
今昔小町譚 一
昔語丹前風呂 一
先讀三國小女郎 一
朝茶湯一寸口切 一

西國三十三所觀音圖 一
同 順禮哥 一
同 畧縁起 二
閑居忘草 二
唐士談語 一
十善戒法語 一

御經之部

心經和訓鈔 一
高王觀音經 一
因位和賛 一
菩提和賛 一
因果經 一
年中暦講譯 一
濵の真砂石川草紙 二
其寫繪戯俤 二
躾草娘庭訓 二
同 假名附 一
中臣祓正義 一
教訓伊呂波哥 一
小謡断金集 一
永樂庭訓往来 一
同 假名附 一
道戯縁起 一
永樂大雜書 一
古錢價録 一
煎茶早指南 一
木石居煎茶訣 二

女今川貞操鑑 一
繪本女今川 一
同庭訓往来 三
同咲分勇者 二
同曽我物語 二
同大江山 二
同義経記 一
同忠臣蔵 一
同失的心 一
同狐嫁入 一
同名古屋於妃 一
同公時一代記 一

尾州名古屋本町通七丁目
永樂屋東四郎藏板

萬室年代記 一
年代調法記 一
松月堂百瓶 三
立花當用集 一
諸禮大學 一
四季獻立集 一
通俗西湖佳話 四
燒物出所 一
秉穗録 四
彼此合符 二
大日本國郡全圖 二
三河國全圖 一
美濃國全圖 一

發行書林

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 通二丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
太阪心齋橋筋北久太郎町 河内屋喜兵衛
同 心齋橋筋安土町南江入 河内屋和助
京都二条通衣ノ棚角 風月庄左衛門
同 麩屋町通姉小路上ル 俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎

国立公文書館
National Archives of Japan